

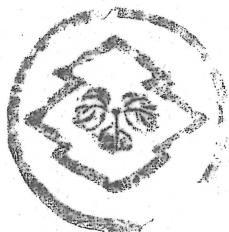
雲仙市文化財調査報告書 第10集

nabeshimajinyaato

鍋島陣屋跡

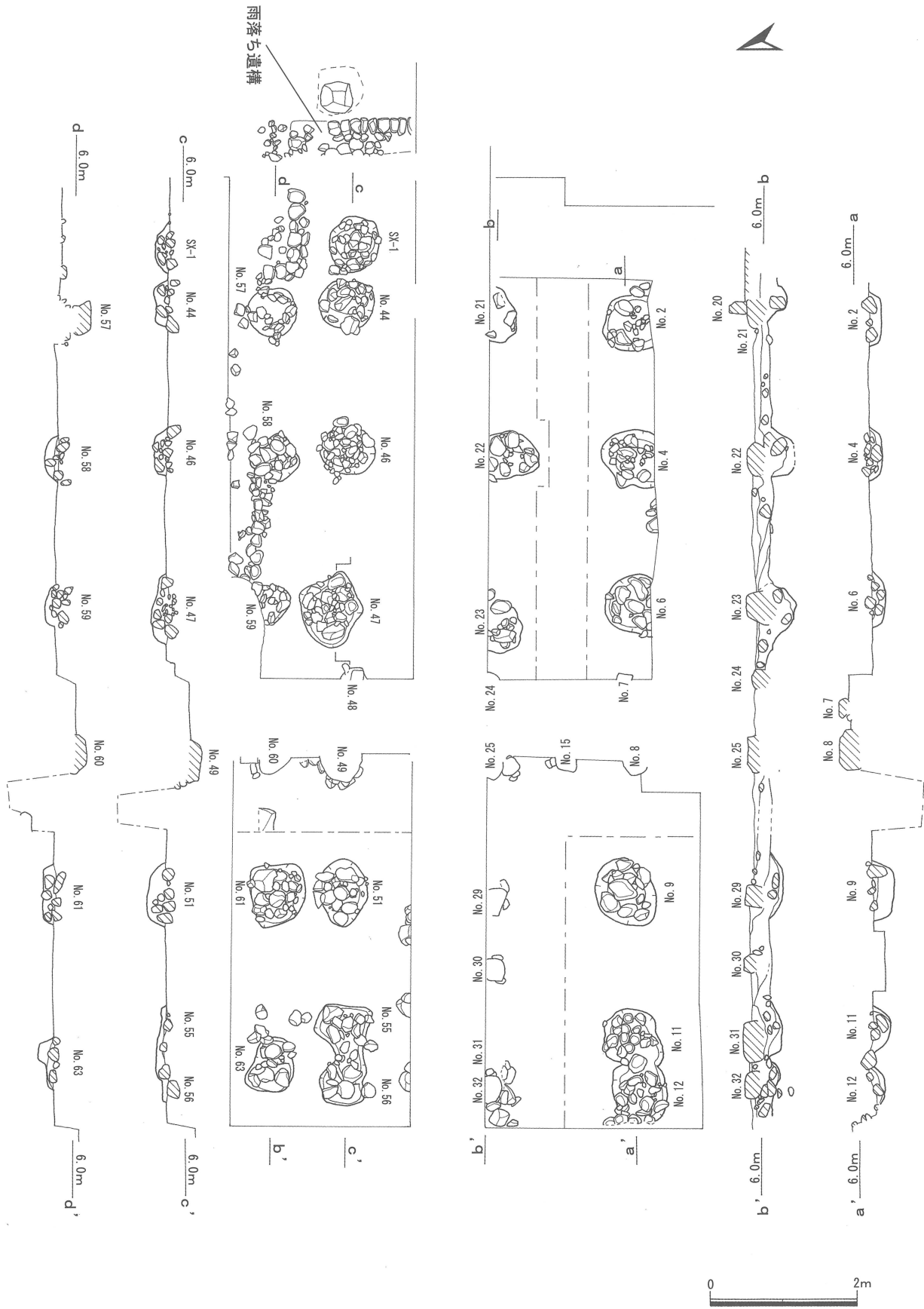
—重要文化財「旧鍋島家住宅長屋門ほか4棟」

保存修理工事に伴う発掘調査報告—



2012

長崎県雲仙市教育委員会



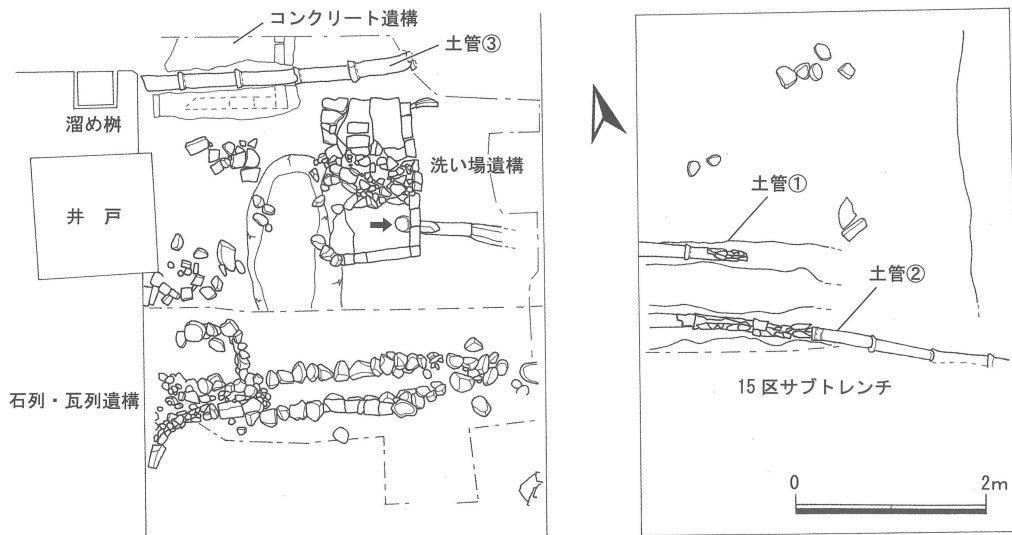
第 24 図 主要部現建物栗石地業及び現建物関連遺構 (1/80)

15区・16区検出遺構(第25図)

15区では、土管を検出した。土管①は16区の洗い場遺構から東側の水路方向へ伸びる土管であるが、途中で欠損している。土管②は、南北ベルト下から東側水路方向へ延びる土管である。何本かは砕けており、使用されている様子はない。土層から土管①より古い事が分かる。15区のいずれの土管も、主屋建築段階かそれ以前に使用されなくなったものと思われる。16区から検出した土管③は、井戸脇の溜桝と接続し東側へ伸びる。最近まで使用されていた土管であって主屋建築時に埋設したものであろう。この土管を埋設する段階で一部掘削したと思われる、コンクリート遺構が見られる。板状のコンクリートの表面には、レンガを剥がしたような長方形の跡が見られ、浴室部礎石の外面直下で途切れている。この事から、浴室部に関わる何らかの施設であった可能性が考えられる。

16区において、レンガとコンクリートで構築された洗い場遺構を検出した。初期の検出段階では主屋の礎石直下に見られ礎石撤去後、精査を行うと土管①と接続することが確認できた。第25図の矢印の箇所土管と接続する口が開いている。東側の縁と南側の縁は、縁取りをするようにレンガが数段高く積まれている。これらの事から推測すると水に関係する溜桝状の施設であったことが予想され、この近くにある井戸との関係が考えられた。井戸の東側側面には、穴が空いていて石で塞がれていた。さらによく観察すると低い位置の両端にコンクリートを剥がしたような痕跡が確認できた。また、図面上で井戸は、主屋とは平行でなく北側へ傾いていることがわかる。この傾きと遺構の東側側面がほぼ平行になるようである。これらの事から、レンガとコンクリートでできた遺構は、井戸に付随していた洗い場遺構と判断した。主屋建築段階には確実に破棄されている。

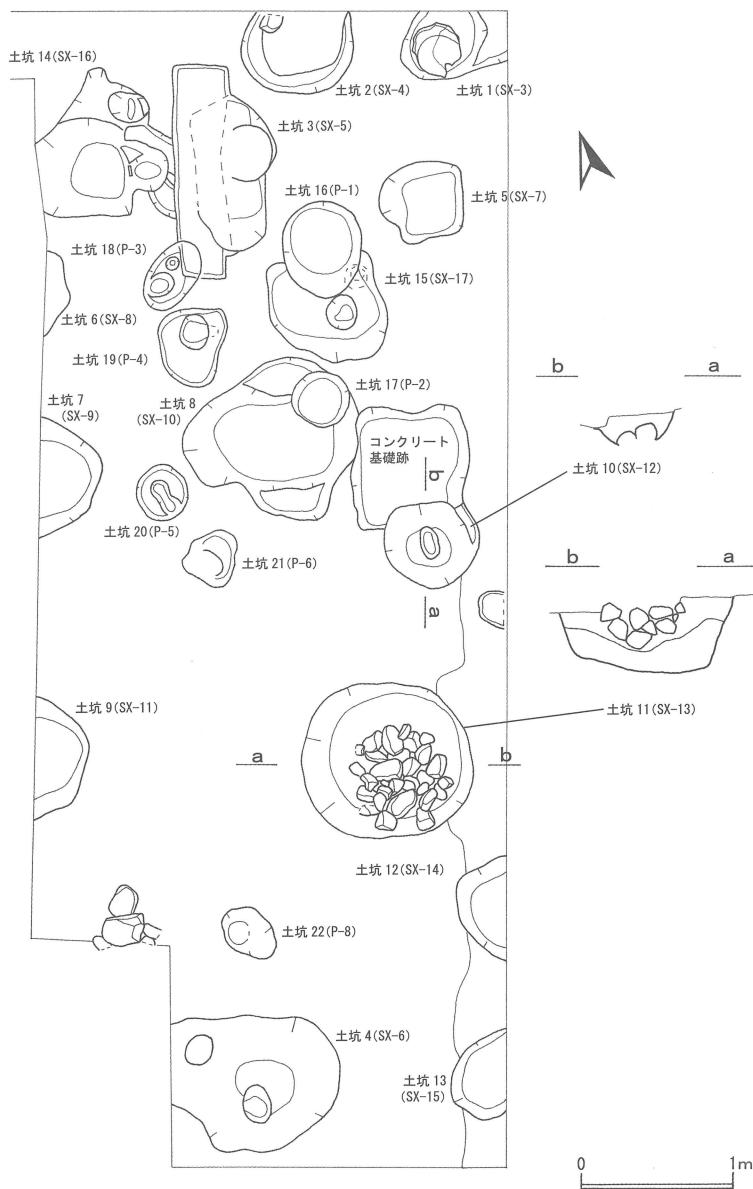
16区において、サブトレンチを設け掘削を行った。その結果、石列・瓦列遺構を第Ⅱ層の土中から検出した。石列は1段から3段積み、2列平行に並ぶ部分と、そこから突出するように並ぶ部分からなる。平行に並ぶ部分はお互い面を内側へ向けているようである。暗渠の跡とも考えられるが不明である。瓦列は、平瓦と丸瓦からなり、縦に2つに割った平瓦は南側の列の上に被せるように並べられ、丸瓦は多くの礫が集中する西側壁際で検出しカーブを描くように並ぶ。途中平瓦と丸瓦の間が、主屋建築時の基礎工事の際に掘削を受けていたため不明であるが、一連の遺構と考えられる。出土状況からは、石列と瓦列は同時期のものとは考えにくく、石列がなんらかの理由で埋まった跡に瓦が並べられたようであり瓦と石との間には数cmの土が入る。18世紀後半以降の遺構か。



第25図 15・16区遺構検出状況(1/80)

14 区土坑群(第 26 図)

14 区において土坑群を検出した。おおよそ 2 つの時期に分かれるようである。土坑 1(SX-3)・土坑 2(SX-3)・土坑 10(SX-12)・土坑 16(P-1)・土坑 17(P-2)は第 I 面検出段階や、第 II 層上面で検出した土坑であるが、その他の土坑は、第 II 層上面では確認できず、十数 cm 掘り下げた面から検出した。また、土色、土質にも大きな違いがみられた。その他の土坑は、土層と埋土の色調の違いが明瞭ではないが、第 I 面で検出した土坑や第 II 層上面で検出した土坑は、はっきりと認識することができた。土坑 1(SX-3)、土坑 2(SX-4)は、土層堆積状況から、第 I a 層の土中からの掘り込みであることを確認できた。また、土坑 1(SX-3)の底からは、甕の底と思われる遺物を検出した(第 32 図 81)。土坑 16(P-1)、土坑 17(P-2)は、しまりが弱い暗褐色土(Hue10YR3/4)の埋土であり、第 I a 層からの掘り込みである可能性が考えられる。土坑 10(SX-12)は、第 I 面検出段階で確認でき、主屋基礎のコンクリートの下になっていた。比較的新しいように思われる遺物を含む(第 33 図 83・84)。第 II 層上面から十数 cm 掘り下げた地点で検出した多くの土坑の中で、特に土坑 11(SX-13)は、内部から礫が集中して出土した。栗石地業の可能性が考えられる。



第 26 図 14 区土坑群検出状況 (1/50)

13 区石列遺構③・溝状遺構(第 26 図)

石列遺構③は、20cm 程の礫からなり東西へ連なる。第 II 層と思われる層中より出土した。溝状遺構は、主屋の基礎を撤去後その直下より出土した。中央が窪む黄色土の帯状の遺構であり、やや勾配を持って南北へ延びる。東側の脇には、連なるように長方形の石が並ぶ。水路であった可能性がある。この溝状遺構の下に潜りこむように石列遺構③がある。このことから、石列遺構③は溝状遺構よりも古い遺構と考えられる。



第 27 図 13 区石列遺構③・溝状遺構 (1/50)

—第三面検出遺構—(第 28 図)

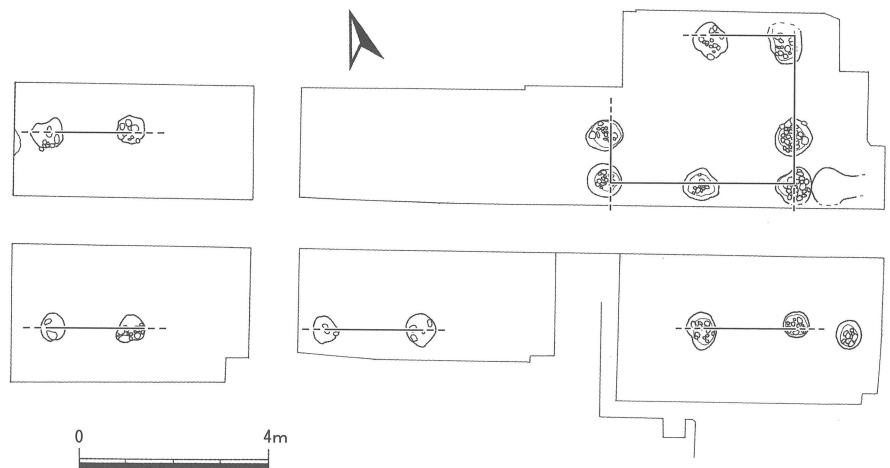
第 28 図は、浴室部と主要部を、第二面の状況からさらに掘り下げた状態である。以下、浴室部と主要部とに分け、遺構の説明を行う。

浴室部(第 29 図)

浴室部からは、11 基の土坑を検出した。内 10 基は、拳大の礫を含む。17 区では、規則正しく配されているように見える。この土坑群が建物の栗石地業であるならば、第 28 図で示したような関係を想定できようか。土坑の深さは、17 区・18 区検出遺構共に検出面から 15cm - 25cm である。断面形は碗形を呈する。概ね土層は、2 層から 3 層に分層でき、各遺構共通して、拳大の礫を多く含む褐色土(Hue10YR4/4)や、にぶい黄褐色土(Hue10YR4/3)等が最上層となる。SX-25・SX-27・SX-28・SX-36 においては、3 層に分層でき 2 層目に灰黄褐色土(Hue10YR6/2)や、褐色土(Hue10YR4/4)等の層が見られる。底部には、暗褐色土(Hue10YR3/3)や褐色土(Hue10YR4/4)、にぶい黄褐色土(Hue10YR5/4)等が見られる。各層、しまりは非常に強く、粘性は弱い。各断面図を見ると、礫を含む最上層は土坑の中央に集中する傾向が見られる。SX-37、SX-38 はやや低い位置にあり、他は標高 5.5m - 5.6m に対して 5.3m - 5.4m である。上面が掘削を受けている可能性があるが、断面図で見る限り検出面は北側へ傾斜しているように見える。18 区においては 3 基検出した。3 基とも平面形は円形、楕円形で断面形は碗形や、やや円錐形である。深さは、検出面から 17cm - 20cm である。土層は、それぞれ 2 層に分層でき、上層は、にぶい黄褐色土(Hue10YR4/3・5/4)や褐色土(Hue10YR4/4)の拳大の礫を多く含む層である。2 層目は、褐色土(Hue10YR4/4)やにぶい黄褐色土(Hue10YR4/3・5/4)である。各層しまりは非常に強く、粘性はさほど強くない。浴室部 17 区・18 区検出の遺構は、多少上面を掘削された遺構もあるだろうが、深さが平均して 20cm 前後であることや、多くの礫を用いている事、土坑の底部に土を入れ、その上に礫を入れている土坑がある事など、主要部現建物の栗石地業との共通点が見られる。このことから、浴室部 17 区・18 区検出の土坑は、栗石地業跡の可能性が考えられる。

主要部(第 30 図)

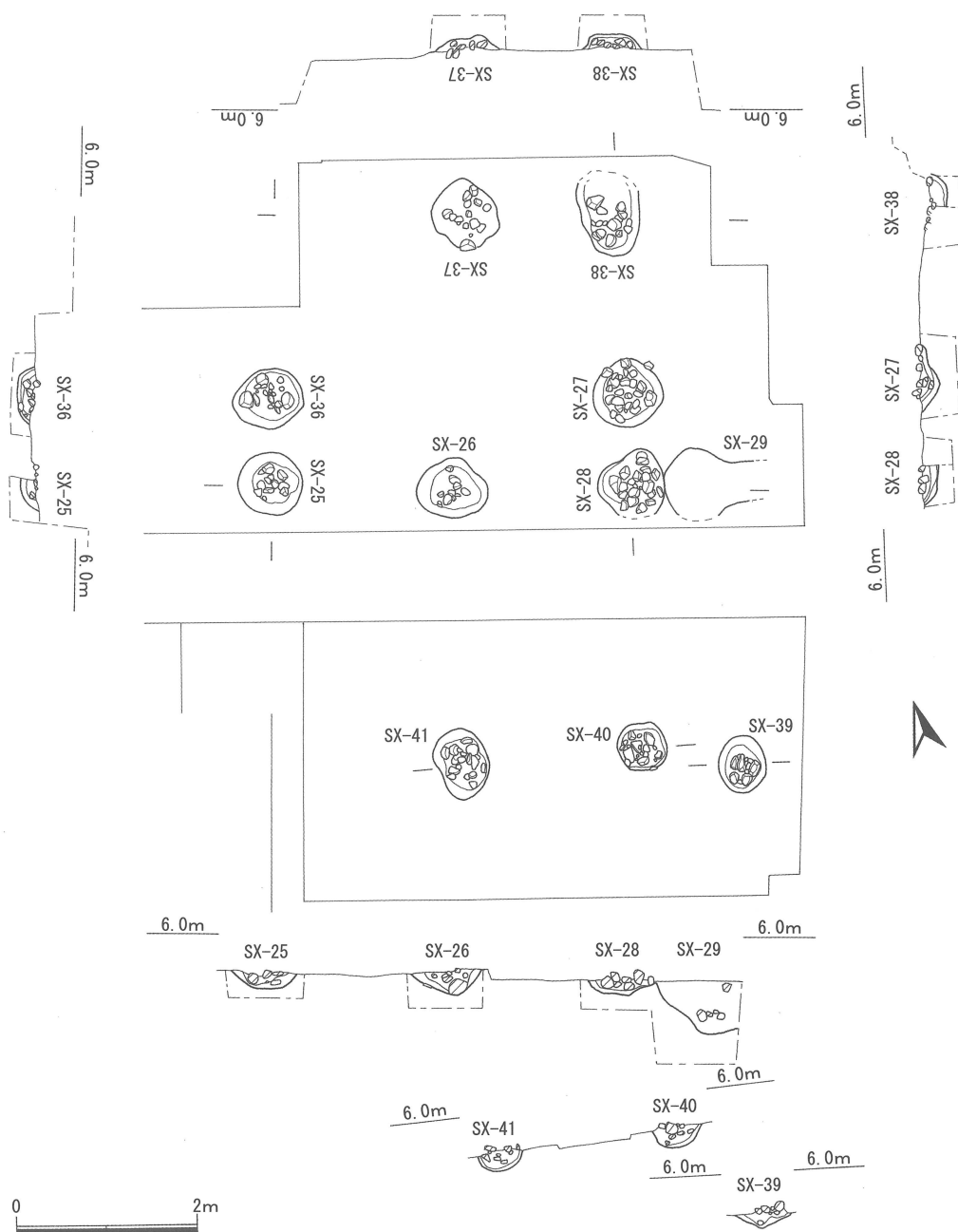
主要部からは、20 区・21 区・22 区から土坑検出した。平面形は円形であり礫を含む。断面形は碗型や円錐形である。深さは、検出面から 10cm - 35cm である。20 区出土の土坑は、SX-18 では明黄褐色土(Hue10YR6/6)を若干含むことや、SX-19 では、にぶい黄橙色土(Hue10YR7/4)を若干含むというような違いはあるが、共通して拳大の礫を少数含む褐色土(Hue10YR)の埋土である。20 区では、3 基の土坑を検出した。SX-22 に関しては壁際の出土であるため詳細は不明である。SX-23 は、1cm - 14cm の礫を多く含む褐色土(Hue7.5YR4/3)の埋土である。粘性、しまり共にさほど強くない。SX-24 は、3 層に分層でき第 1 層は、10cm - 17cm の大きさの礫を多く含む褐色土(Hue10YR4/4)であり、しまり、粘性共に弱い。第 2 層は、にぶい黄褐色土(Hue10YR4/3)の粘性弱く、しまりは非常に強い層である。第 3 層は、にぶい黄褐色土(Hue10YR5/4)の粘



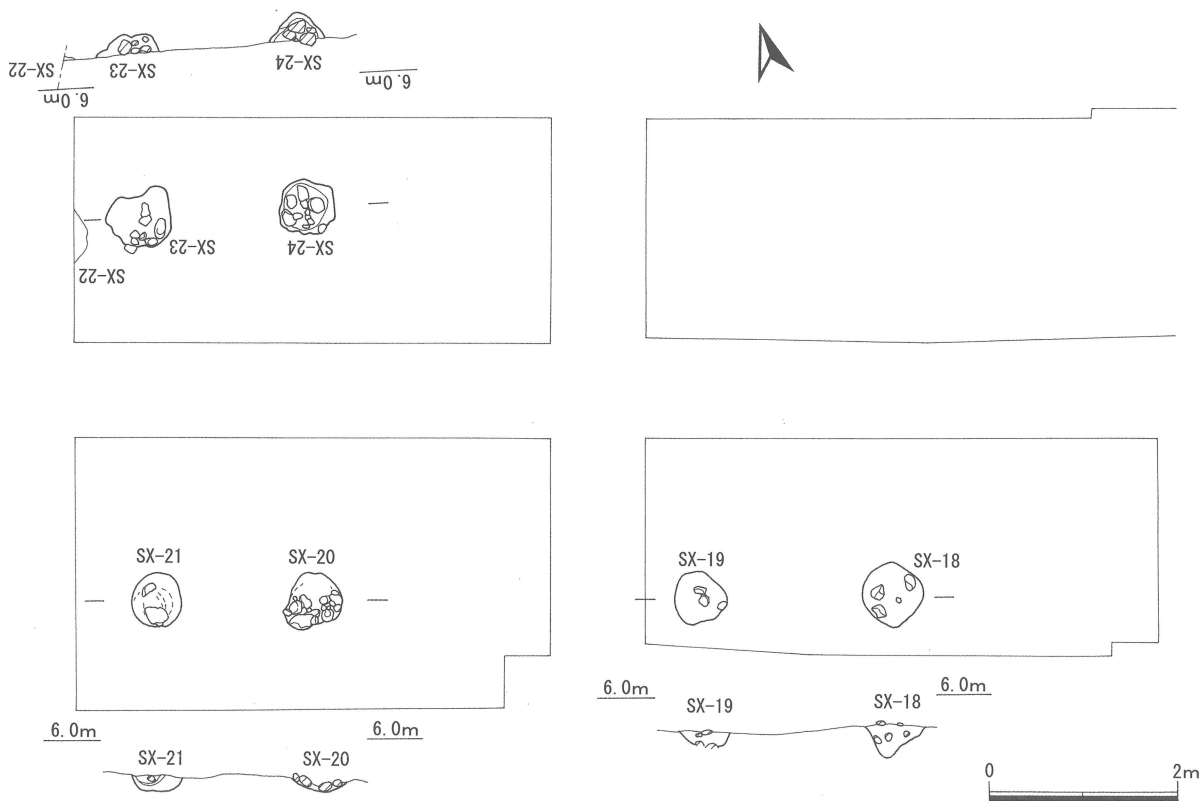
第 28 図 隠居棟第三面平面図 (1/160)

性弱く、しまり非常に強い層である。この土坑の平面では、2重の円を描くような土色の違いが見られる。20区では、2基の土坑を検出した。SX-20は非常に浅く、6cm〜12cmほどの礫を含む褐色土(Hue10YR4/4)の埋土である。しまりは強く粘性はあまり強くない。SX-20は、3層に分層できる。第1層は、2cm〜6cmほどの大きさの礫を含む、褐色土(Hue7.5YR4/4)である。しまり強く、粘性はさほど強くない。第2層は、しまり強く、粘性はあまり強くない、にぶい黄褐色土(Hue10YR4/3)である。第3層は、粘性はあまり強くないが、しまりは非常に強い、にぶい黄褐色土(Hue10YR5/3)である。

第28図の図面上では、17区のSX-40とSX-41、20区の2基の土坑と、22区の2基の土坑を直線で結べないことはないようであるが、途中遺構を確認できず大きく間が空くがあるので浴室部検出遺構を含めて1つの建物跡と想定するのは無理であろう。また、21区、22区検出土坑との関係も同様に、確かに図面上では平行に並んでいるように見えるが、間が大きく空く。建物跡とは想定できない。



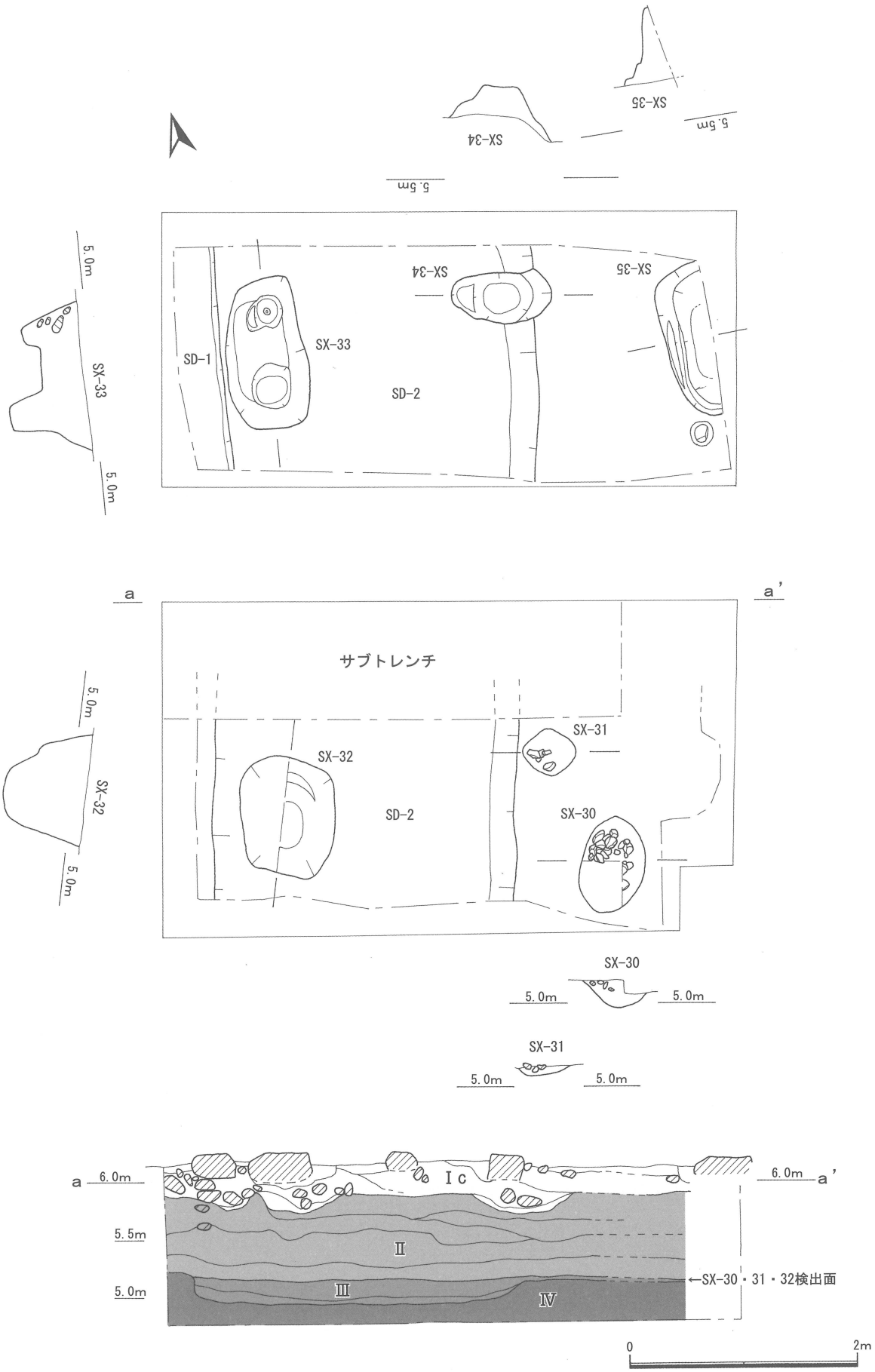
第29図 隠居棟（浴室部）17・18区第三面検出遺構平面・断面図（1/80）



第30図 隠居棟（主要部）20・21・22区第三面検出遺構平面・断面図（1/80）

—第四面検出遺構—（第31図）

21区・22区を第三面の段階からさらに掘り下げ、遺構を検出した状態である。21区からは、土坑と溝状遺構を検出した。土坑の平面形は、楕円形であり、いずれも黄褐色土(Hue2.5YR5/4)を1cmから10cm程度のブロック状に含む、褐色土(Hue10YR4/4・Hue7.5YR4/4)の埋土である。しまりはさほど強くなく、粘性も強くはない。溝状遺構はSD-1・SD-2からなる。SD-1は西壁沿いに南北に伸びる非常に浅い遺構である。土層からSD-2は、SD-1を拡張する形で設けられた遺構(第19図)と考えられ、検出幅は西壁から最大で3.1m程である。深さは20cmから30cm程度である。埋土は第1節のところでは触れたが、第Ⅲ層に分類している。(第19図)22区においてもSD-2を検出した。22区検出遺構からは、土坑と溝状遺構を検出した。SX-30は、拳大の礫を多く含む暗褐色土(Hue7.5YR3/4)に近い色調の埋土である。SX-31は、拳大の礫を多く含む褐色土(Hue7.5YR4/3)に近い色調の埋土である。いずれも、しまり、粘性共にさほど強くはない。SX-32は、にぶい黄褐色土(Hue10YR5/4)と褐色土(Hue10YR4/4)の混合土の埋土である。しまりは強いが、粘性はさほど強くはない。SD-2は、上記でも触れたように21区と連なる。21区において検出することができなかった西側の岸を検出した。レベルから東側の岸よりもやや高い事が分かる。なおSD-1は確認できなかった。22区において検出した土坑は、第Ⅲ層上面より検出した。よって第Ⅲ層上面においてSD-2より1つ新しい面があるものと思われる。21区において検出した土坑も平面形は楕円であり、埋土の色調も似ているように思う。22区検出土坑同様、第Ⅲ層上面から掘り込まれた遺構であった可能性がある。第Ⅲ層よりの出土遺物は、21区において土器と陶器片の2点だけであり、相対年代を検討することはできなかった。少なくとも、上層Ⅱ層より18世紀後半代の遺物を確認していることから、第四面検出の遺構は、18世紀後半以前の遺構の可能性はある。(竹田)



第31図 隠居棟（主要部）21・22区第四面検出遺構平面・断面及び22区北側土層堆積状況（1/50）

第3節 検出された遺物

土師器 No. 1～No. 4・SX-3(第32図)

土師器 No. 1～No. 4 は、隠居棟主要部第一面より2枚組みで出土した地鎮に関わるものと考えられる遺物である(第20図)。SX-3 は、主屋14区において検出した土坑で、底に甕の底と考えられる遺物を検出した(第26図)。以下、遺物の特徴を述べる。

73・74 は土師器 No. 1、75・76 は土師器 No. 2、77・78 は土師器 No. 3、79・80 は土師器 No. 4 である。ほぼ同一の胎土、同一の文様で、底部も同一の調整が施されている。口径10.9cm～11.2cm、底径7.4cm～8cm、器高2.1cm～2.8cm である。見込みには、浮き彫りにしたような鶴と考えられる鳥の文様等が見られ、文様部には、滑石粉と考えられる微粒子が見られる。底部は、ヘラミガキ調整が施されている。万延元(1860)年建築の隠居棟主要部の地鎮に関わる遺物であろう。在地の土器の胎土に見られる角閃石は見られない。よって、搬入と考えられる。長屋門より出土した土師器④の7と43とに共通点がみられる。口径、底径、器厚等は大きく違うが、内面見込みの文様や底部の調整が類似している。

81 は、14区土坑1(SX-3)より出土した甕の底と考えられる遺物である。陶器ではなく土器である。底径は34.5cmほどである。胴部は、内面・外面共にヨコ方向のナデ調整、内面見込みは、同心円状のナデ調整。底部は、ヨコ方向のナデ調整である。土層から、明治期以降から昭和5年以前の遺物と推測される。

埋め甕・土坑10(SX-12)、土師器・瓦(第33図)

82 は、埋め甕遺構(第21図)の甕である。陶器というよりも土器に近い。やや胴部は膨らみを持ち口縁部は被厚する。内面は、ヨコ方向へのハケ調整が見られるが、剥離が激しく明瞭でない。外面口縁部は、ヨコ方向へのハケ調整、頸部は荒めの斜め・ヨコ方向へのハケ調整である。胴部は、底部から口縁部方向への斜めのハケ調整が見られる。また、口縁部から底部にかけて一筋の粘土を繋ぎ合わせたような線が観察できる。胴部の中央よりやや下に外から空けたものと考えられる穿孔が見られる。万延元年～昭和5年以前の遺物と考えられる。

83 は、主屋14区検出の土坑10(SX-12)(第26図)より出土した磁器製碗である。見込みから口縁部までほぼ一定の器厚である。高台畳付は釉ハギである。外面に染付けが見られ、線刻後、色をのせた葵の文様、そのうえから赤色で文字文が見られる。明治期以降のものか。

84 は、主屋14区検出の土坑10(SX-12)(第26図)より出土した播鉢である。大半を欠損しているため全容は不明である。口縁部は外反し、内面にはカキ目が施されている。内面・外面共に釉が施されているが、自然釉の可能性もある。明治期以降のものか。

85 は、第Ia層より出土した薄いつくりの土師皿である。底部には糸切り離し痕が見られる。胎土には、雲母と考えられる微粒子と極小礫を含む。角閃石が胎土に見られないことから、搬入品の可能性がある。

86 は、主要部20区第II層から出土した焼塩壺蓋である。外面側面はヨコナデ調整、外面天井部には同心円状のナデ調整が見られる。内面天井部には、布圧痕が見られる。胎土には、金雲母と思われる微粒子と極小の礫を含む。

87 は、第Ia層出土の軒棧瓦である。右巻の三巴文の小丸瓦当と平部瓦当に唐草文が見られる。平部瓦当端部に三角形の面取りが施されている。瓦頭部、凸面、凹面に滑石粉と考えられる微粒子が見られる。キラコと考えられる。

88 は、第Ia層より出土した軒棧瓦である。小丸瓦頭には、神代鍋島家の家紋、平部瓦頭には、唐

草文と考えられる文様が見られる。凹面に滑石粉と考えられる微粒子が見られる。キラコか。現長屋門建物の軒に使用されている瓦と同様の瓦と考えられる。

89 は、第 I b 層より出土した瓦である。道具瓦の一種と考えられる。瓦頭部には神代鍋島家の家紋が見られる。裏面の欠損部分には、カキ目が見られる。瓦当面には、滑石粉と考えられる微粒子が見られる。キラコと考えられる。

90 は、主屋 16 区第 I c 層より出土した棟瓦である。破片であるが、玉口(瓦同士を重ねる時の接続部分)である。外面は、玉口付近のみヨコ方向の細かいハケ調整、他は粗い斜め方向のハケ調整である。裏面は、玉口付近に細かいヨコ方向のハケ調整が見られ、他は斜め方向の粗いハケ調整である。雲仙市歴史資料館国見展示館に展示している棟瓦と同様の瓦の破片と考えられる(図版 20 90 関連)。

陶器・磁器(第 34 図)

91 は、第 I a 層出土の陶器鉢である。全体的に薄い作りであり、若干内湾ぎみに立ち上がる。口縁部は外へ張り出す形である。高台は削り出しによる成形である。内面は一面釉を施してあり、口縁部は粗く釉を施してある。外面は飛鉋による装飾を施した後、圏線を描くように釉を施し、口縁部からの釉の垂れが見られる。

92 は、第 I a 層より出土した陶器皿である。口縁部は外反し波状の口縁である。高台は、やや外へ開き畳付及び高台内は無釉である。

93 は、第 I a 層より出土した陶器蓋である。上面は釉が施されているが、裏面は無釉である。

94 は、第 I a 層より出土した 93 より一回り小さい陶器蓋である。上面には釉が施されているが、裏面は無釉である。上面には貫入が見られる。

95 は、第 I a 層より出土した褐釉土瓶である。内面は施釉されているが、口縁部は無釉である。外面は上部半分(口縁部を除く)が施釉されているが、下半分は無釉である。19 世紀頃のものか。

96 は、主要部 22 区第 II 層より出土した陶器色絵碗である。外面はにぶい橙色の釉の上から、黒色や白色等で山水文と考えられる文様が見られる。高台内にも文様が見られるが大きく欠損しているため不明である。内面は乳白色の釉が施してある。

97 は、第 I a 層出土の磁器皿である。口縁部は輪花である。内面には、山水文が見られ、外面には山文と思われる文様が見られる。高台畳付は、釉ハギである。

98 は、第 I a 層から出土した磁器製皿である。直線的なラインを持つ器である。器厚は薄く、やや角度をもって立ち上がり、口縁部は外反する。内面には雷文、文字文、梅文が見られる。外面には、3 重の圏線がめぐり、高台内面には 1 重の圏線が見られる。内面の文字文は左から、「間宿学貨」と読める。明治期以降のものと考えられる。

99 は、第 I a 層より出土した磁器皿である。高台畳付は釉ハギを施してあり、高台内には 1 重の圏線がめぐり、その中央には、「大〇〇化〇〇」(〇は判読不能)が描かれている。外面胴部には、橘文が見られる。器壁は全体的に薄く、内面には文様が見られるが、大部分を欠損しているため不明である。

100 は、第 I a 層より出土した磁器碗である。高台から口縁部に向けて緩やかに立ち上がる。内面口縁部には圏線と不明文、見込みには 1 重の圏線がめぐりその中央には葡萄文と考えられる文様が見られる。高台外面には、2 重の圏線がめぐり、胴部にはツル文が見られる。19 世紀後半のものか。

101 は、第 I a 層より出土した磁器製碗である。口縁部にかけて緩やかに立ち上がり、器壁は全体的に厚く、畳付は釉ハギであり、焼成時に付着したと思われる砂と考えられる粒が見られる。内面口縁部には、圏線と円文、見込みには、円が描かれており、その中央には円を幾重にも重ねたような文様が見られる。19 世紀後半のものか。

102 は、第 I a 層より出土の磁器碗である。高台から緩やかに立ち上がり、内面見込みには、1 重の圏線がめぐり、その中央に不明文様が見られ、外面には草文が見られる。高台畳付は釉ハギである。

103 は、第 I a 層より出土した磁器製小坏である。高台から緩やかに立ち上がり、器壁は全体的に薄い。内面見込みには、梅文が見られる。高台畳付は、釉ハギである。

104 は、第 I a 層出土の磁器碗である。緩やかに立ち上がり口縁部は若干外反する。口縁部内面には、雷文が見られる。見込みには、1 重の圏線がめぐり、その中央に環状に松竹梅文が見られる。外面胴部にも文様が見られるが、大きく欠損しているため詳細は不明である。高台外面にも 2 重の圏線がめぐり、19 世紀後半のものか。

105 は、第 I a 層出土の磁器碗である。高台から直線的に立ち上がる。外面に桜と思われる文様が見られる。高台外面にも 2 重の圏線がめぐり、内面は無文である。有田産か。

106 は、第 I a 層より出土した小坏である。高台からやや内湾するように立ち上がる。内面は無文である。外面は、型紙摺による松林が見られ、高台外面には 2 重の圏線がめぐり、高台畳付は釉ハギである。

107 は、第 I a 層より出土の碗である。器壁は全体的に薄く、高台から内湾するように立ち上がる。外面には、草文が見られる。また高台畳付は釉ハギである。

108 は、第 I a 層より出土した磁器小坏である。やや厚手の器壁を有し、高台から外へ開くように立ち上がる。外面には、笹文が見られる。高台畳付は釉ハギで、焼成時付着したと思われる、砂と考えられる粒の付着が見られる。

109 は、第 I a 層と土坑 10(SX-12)出土遺物との接合資料の京焼風の磁器碗である。やや歪な器形である。外面胴部には植物文と考えられる文様が見られる。内面、外面共に貫入が見られる。高台から、高台際にかけては、無釉である。

110 は、第 I a 層より出土した磁器小坏である。器厚は見込み中央が最も厚く、口縁部へ向けて薄く緩やかに立ち上がる。外面には、笹文が見られる。高台畳付は、釉ハギである。

111・112 は同様の特徴を持つ、第 I a 層出土の磁器碗である。器壁は薄く、高台から外側へ広がるように、直線的に立ち上がる。外面には、緑色で○、藍色で×の文様が見られる。高台畳付釉ハギである。昭和初期頃のものか。

磁器・タイル・ガラス瓶(第 35 図)

113 は、第 I a 層出土の磁器小碗である。高台から緩やかに立ち上がる。外面胴部には、花文とスズメの文様が見られる。明治期以降のものと考えられる。

114 は、第 I a 層より出土した磁器小碗である。外面には花と鳥の文様が見られる。器自体は 113 と類似した特長をもつ。外面の文様も、柄は違うが、文様の色調や施文方法は同一と考えられる。明治期以降のものと考えられる。

115 は、第 I a 層より出土の磁器水差である。器厚は、ほぼ均一な厚さである。頸部と注口は、胴部に接合している。頸部接合付近には浮き彫り状の細かな装飾が施されている。内面は頸部のみ施釉され、他は無釉である。見込みには布圧痕が見られる。外面は底部と底部際をのぞき施釉されている。口縁部内面には、半円状の線を連続させたような文様が見られ、外面頸部には圏線上部に半円を連続させたような文様、胴部には、花と考えられる文様が見られる。底部と底部際は、無釉である。

116 は、第 I a 層出土の磁器蓋である。ほぼ均一な厚さであり、口縁部はやや外反する。外面には鱗状の文様と、○に獅子と思われる文様が見られる。つまみ際には 2 重の圏線、つまみ外面にも 2 重の圏線が見られる。つまみ内にも 1 重の圏線が見られる。内面口縁部には雷文、見込みには 1 重の圏

線、中央にも文様が見られるが大きく欠損しているため不明である。

117 は、第 I a 層出土の磁器蓋である。ほぼ均一な厚さであり、口縁部は外反する。つまみ部分には、釉ハギを施してあり、外面には2重の圏線がめぐり、外面には型紙摺で花文、草文等が見られる。内面には、口縁部に雷文が、見込みには2重の圏線めぐり、その中央には、軍配文が見られる。

118 は、第 I a 層より出土した磁器色絵段重である。円筒形の器で、器壁は底部から、ほぼ直角に垂直に立ち上がる。外面には、幾何学的な文様が施されている。

119 は、第 I a 層より出土した磁器皿である。平らな底部から緩やかに立ち上がる。蛇目高台である。外面には、唐草文と思われる文様が見られ、高台外面には2重の圏線がめぐり、内面には、植物文と思われる文様等が見られるが、大きく欠損しているため詳細は不明である。

120 は、浴室部 17 区第 II 層より出土した陶器皿である。緩やかに立ち上がり口縁部は輪花である。内面見込みには、足付ハマの痕と考えられる痕跡が4箇所見られる。高台は無釉で、削り出しである。高台内には、兜巾が見られる。

121 は、浴室部 18 区第 II 層出土の磁器皿である。やや厚手の磁器皿である。見込みから口縁部まで、ほぼ均一な厚さを持ち、緩やかに立ち上がる。内面には、器壁には菊唐草文と思われる文様、見込みに、2重の圏線がめぐりその中央には五弁花文が見られる。また、見込みには、蛇目釉ハギが施してある。高台畳付は釉ハギである。18世紀後半頃の波佐見焼か。

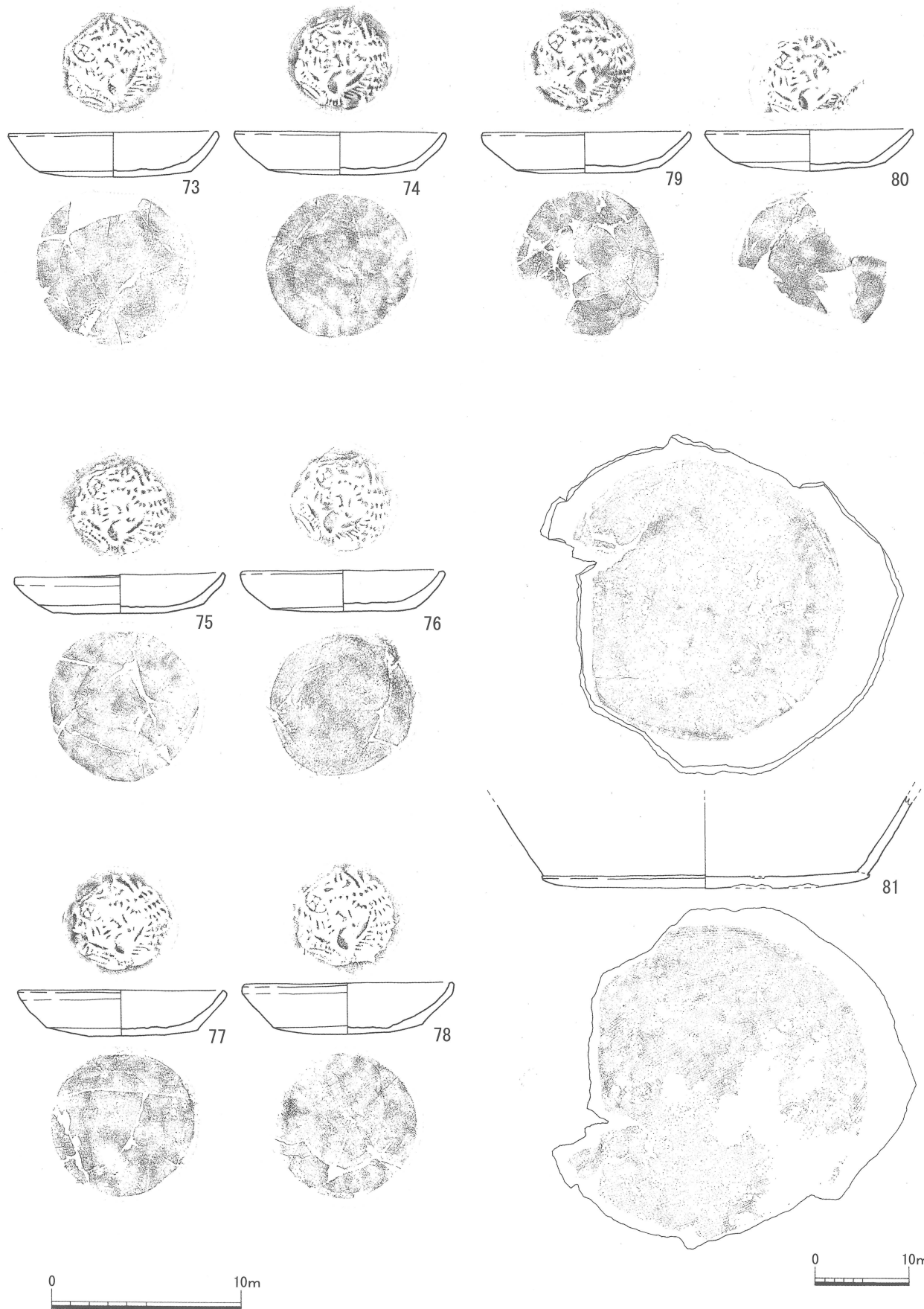
122 は、主要部 19 区第 II 層出土の磁器碗である。第 II 層としているが、主要部と浴室部の接続部あたりからの出土であるので、第 I b 層と分類できる可能性がある。器壁は高台から直線的に立ち上がり、口縁部はやや外側へ開く。外面には、商号と思われる文字等の文様が見られる。

123 は、主要部 22 区より出土した磁器の器片である。形状は、復元すると楕円形の袋状器であると推測される。香炉の可能性もある。口縁部付近には、花文と思われる文様が見られる。底部は無釉であり、回転を利用した調整が見られる。

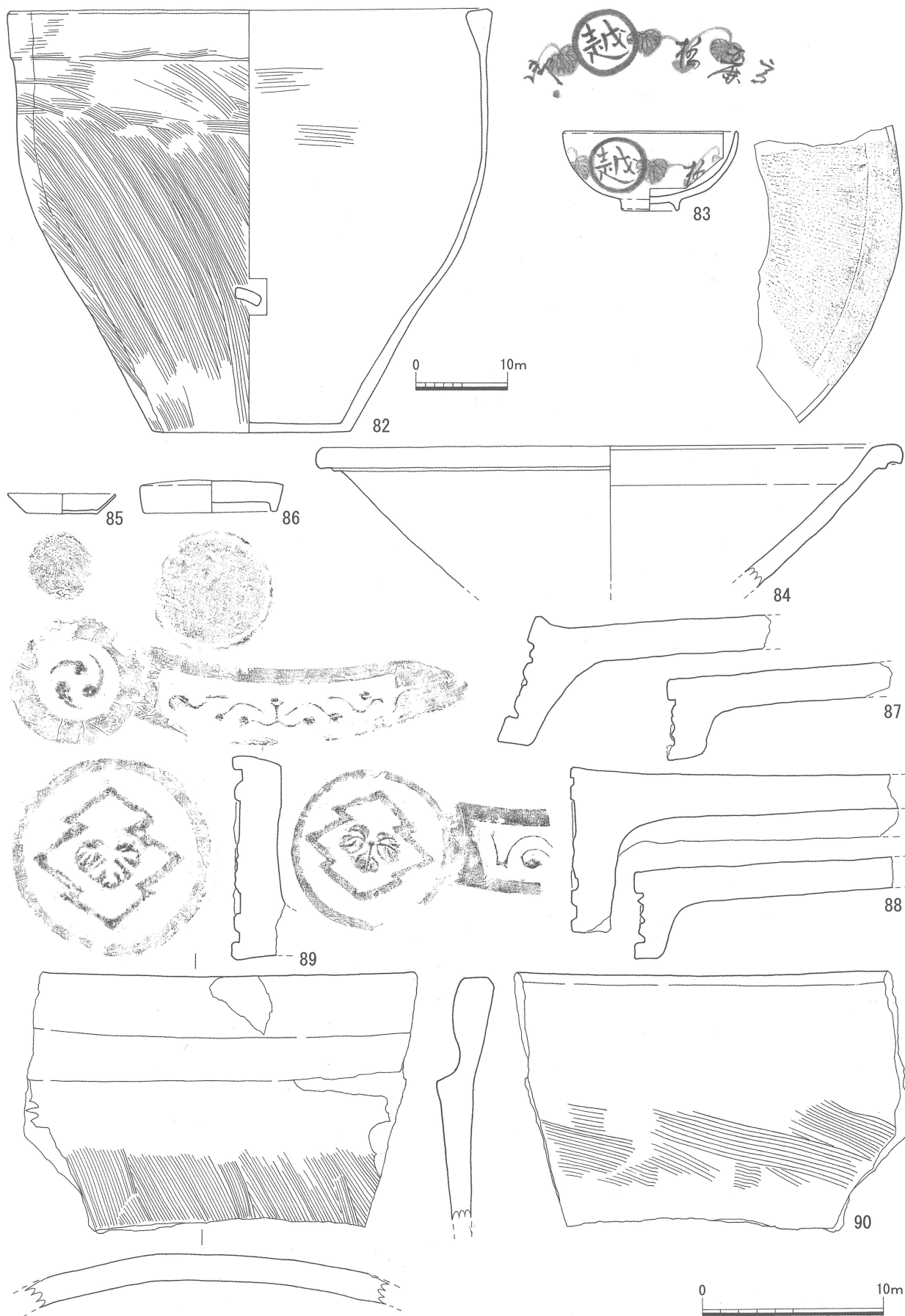
124 は、第 I a 層出土の陶器製タイルである。表面側面には釉が施されているが、裏面は無釉である。表面には、型紙摺で植物文等が見られる。明治期以降から昭和5年以前のものである。

125～128 は、第 I a 層より出土したガラス瓶である。125 は、スクリュウ栓の、糊瓶と思われる資料である。126 は、スクリュウ栓のインク瓶である。底部には半円に M とその下に U2 のエンボス加工が施されている。127 は、コルク栓の薬瓶と考えられる資料である。128 は、スクリュウ栓の外面の装飾が施されている用途不明のガラス瓶である。いずれも、明治期～昭和5年以前のものと考えられる。

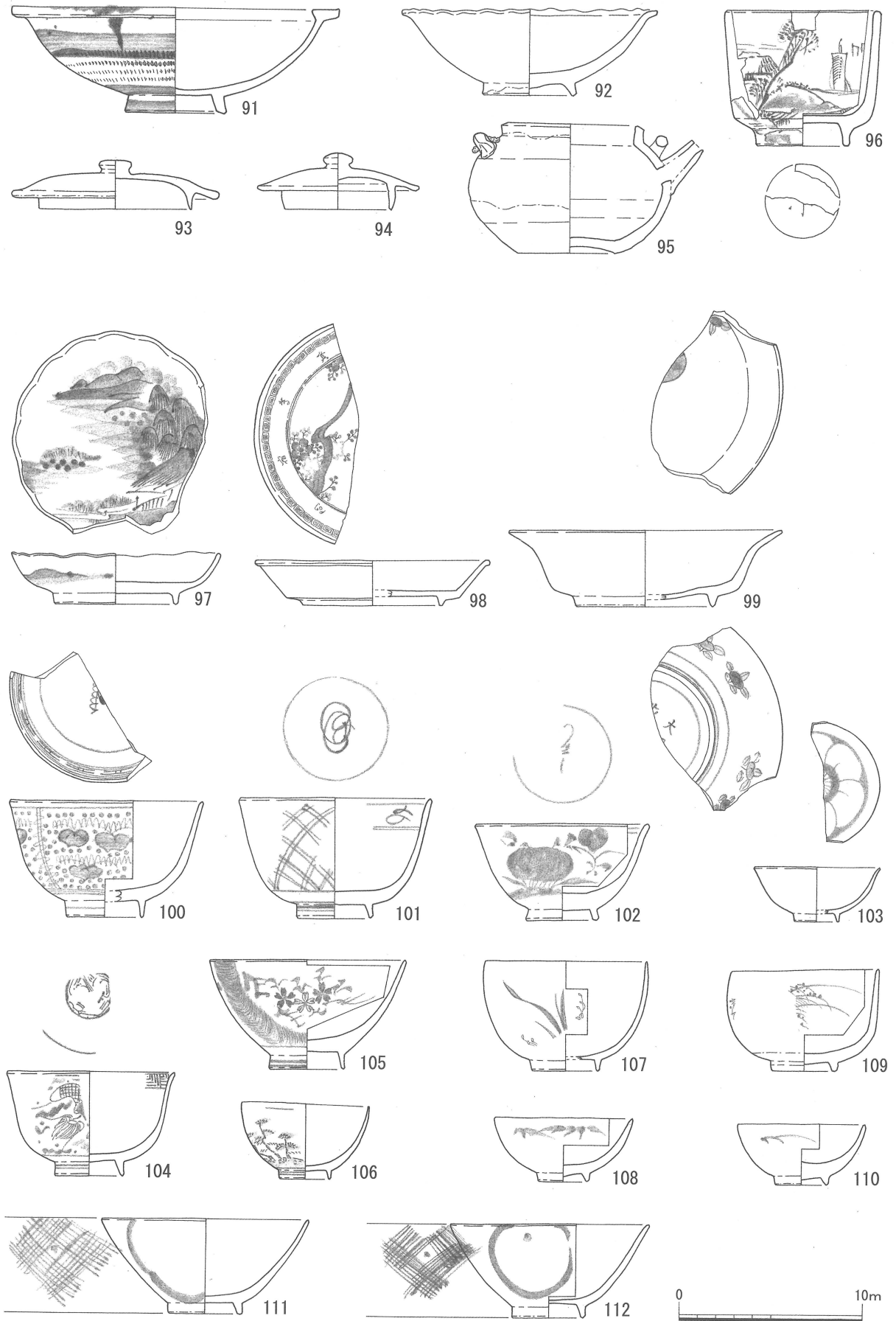
(竹田)



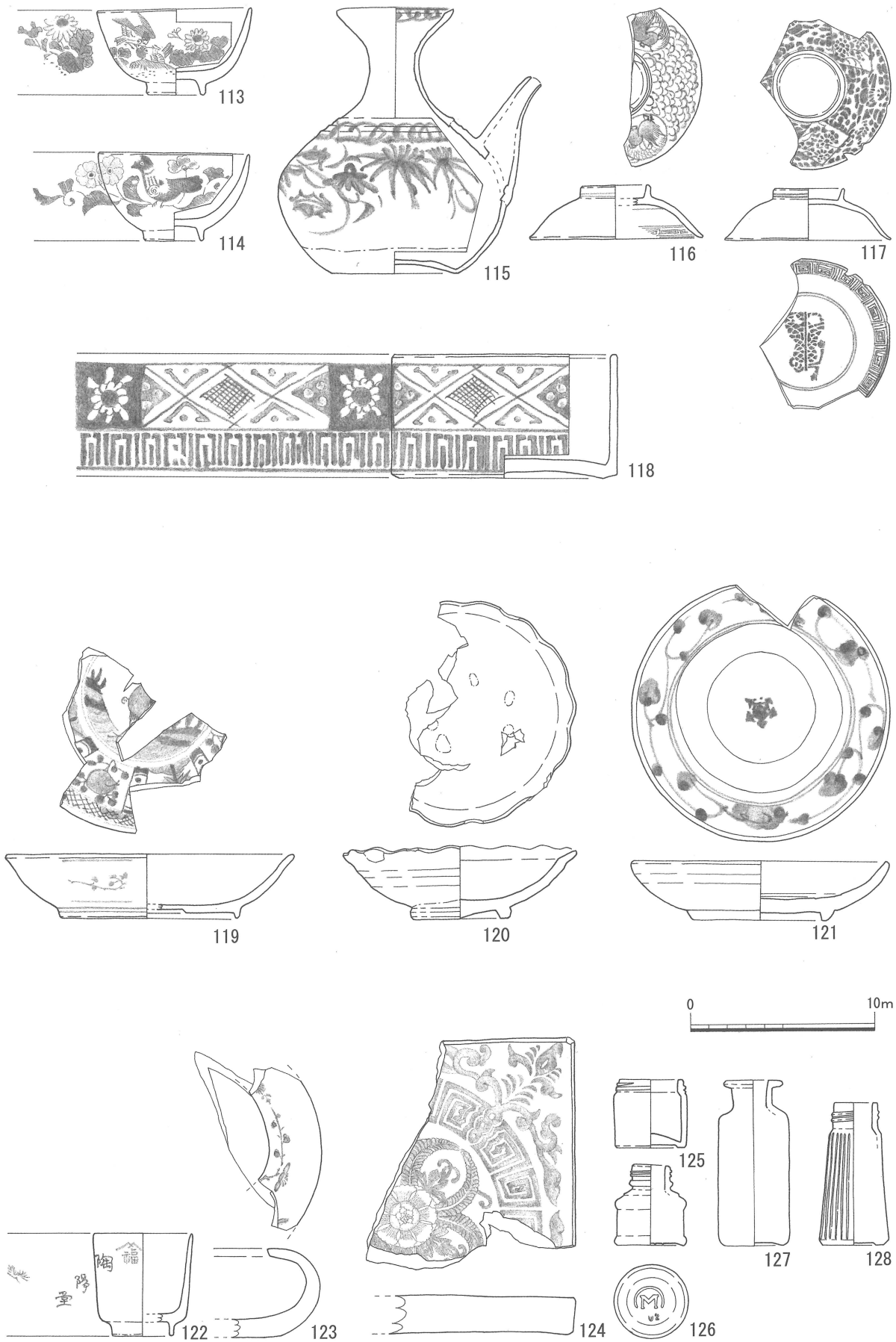
第 32 図 主屋・隠居棟出土遺物（土師器 No. 1~No. 4・土坑 1）（1/3・1/6）



第33図 主屋・隠居棟出土遺物（埋め甕・土坑10・土師器・瓦）(1/3・1/6)



第34图 主屋・隠居棟出土遺物（陶器・磁器）（1/3）



第35図 主屋・隠居棟出土遺物（磁器・タイル・ガラス瓶）（1/3）

第4章 まとめ

第1節 概要

平成 22(2010)年度から平成 23(2011)年度にかけて、鍋島陣屋跡の発掘調査を実施した。鍋島陣屋跡は、雲仙市国見町神代、国選定の重要伝統的建造物群保存地区内に位置する。屋敷地は、中近世の城郭跡である鶴亀城(神代城)跡を背にし、屋敷地正面東側には、武家町が広がる。敷地には、庭園や主屋をはじめ近代和風建築が建ち並び、平成 19(2007)年に国の重要文化財に指定されている。その中の長屋門、主屋(家政部)、隠居棟(主要部・浴室部)が、老朽化のため全解体修理もしくは、一部解体修理となった。建物の解体後、基礎部にコンクリート製の基礎を埋設する。よって発掘調査を行うこととなった。まず平成 22 年度に、長屋門の発掘調査を実施した。長屋門は、文久 2(1862)年に建築を開始し、慶応元(1865)年に完成した建物である。調査区を南長屋部に 1 区～4 区、北長屋部に 5 区～8 区を設け、調査の都合で門部に 9 区～12 区を設け発掘を行った(5 頁第 3 図)。なお、この報告書では都合上、平面図を基礎石撤去前の第一面と、基礎石撤去後の第二面とに分けて報告を行った。(第 6 頁第 4 図・第 8 頁第 7 図)現長屋門に伴う遺構・遺物として、SX-1(長屋門)(7 頁第 5 図)、SX-2(長屋門)(7 頁第 6 図)、土師器①～④(6 頁)を検出した。SX-1(長屋門)は、19 世紀後半頃から 20 世紀初期頃まで使用されていたと考えられる廃棄土坑で、多くの遺物(20 頁第 15 図)と共に貝殻が出土した。SX-2(長屋門)は、19 世紀後半以降に使用されていた土坑で、瓦片や土師器(20 頁第 15 図 33)が出土した。土師器①～④は、現長屋門の基礎石脇より、2 枚組みで 4 箇所から出土した。土師器①の 1 枚には、密教の法具の一種である輪宝(八鋒輪宝)と考えられる文様が墨書されている。土師器②の 1 枚にも簡略された輪宝(八鋒輪宝)と考えられる文様が墨書されている(19 頁第 14 図)。全て礎石の脇から 2 枚組みでの出土であるので、現長屋門の地鎮遺構と考えられる。長屋門の礎石撤去後、さらに掘り下げを行い、新たな遺構を検出した。調査区北側においては、昭和 5 年増築の北下屋部基礎の栗石地業を検出(8 頁第 8 図)、2 区・4 区・10 区・12 区・6 区からは、一連の遺構と考えられる帯状の石列遺構を検出した。石列は、現長屋門の向きとは平行にならず、約 3 度ずれている(9 頁第 9 図)。1 区・2 区・4 区・6 区・7 区・8 区にはそれぞれサブトレンチを設け掘削を行った結果、4 区からは石列状の遺構(10 頁第 10 図)を、8 区からは、石積み状の遺構を検出した(10 頁第 11 図)。門部からは、非常に硬質な面と石列を検出した(12 頁第 12 図)。硬化面は、武家町方向へ傾斜する状況であるので旧路面と考えられ、石列は、面が北側石塀の表の面と揃い、帯状石列遺構と直行する状況であった。しかし、石塀と石列の間には、現長屋門建築時の造成土が入る。石塀も現長屋門に直行せず、約 3 度ずれ、石列遺構と並びが揃う。このことから、石列遺構と石塀との関連が指摘されている(13・14 頁)。6 区・8 区サブトレンチからは、土師器や陶磁器を検出した。年代が想定できるもので最も古いものは、焼塩壺(21 頁第 16 図 56)で 1674 年～1682 年頃のものである。

平成 23 年度は、主屋・隠居棟の発掘調査を実施した。昭和 5(1930)年建築の主屋には 13 区～16 区、明治 35(1902)年増築の隠居棟浴室部には 17 区・18 区、万延元(1860)年建築の隠居棟主要部には 19 区～22 区を設定し発掘をおこなった(25 頁第 18 図)。この報告書では都合上、平面図を第一面～第四面に分けて各面ごとに遺構の説明をおこなった。第一面(28 頁第 20 図)は、建物基礎石撤去前の段階で、主要部建物基礎石脇から土師器 No. 1～No. 4 が出土した(28 頁第 20 図)。各 2 枚組の出土で、合わせ口で重ねられた状態を観察できたものもあった。主要部建物に関連する地鎮遺構と考えられる。主屋 16 区からは、埋め甕遺構を検出(29 頁第 21 図・43 頁第 33 図 82)した。土層から、万延元年以降から昭和 5 年頃の間で使用されていた事がわかっている。13 区・14 区からは、石列遺構①・②を検出し

た(29頁第22図)。明治期以降から昭和5年頃の遺構と推測される。

第二面は、各建物の基礎を撤去後さらに掘り下げを行った状態である。(30頁第23図)主要部からは、現建物に伴う基礎栗石地業(31頁第24図)を検出し、浴室部との接続部付近からは、主要部関連の遺構と考えられるSX-1や雨落ち遺構を検出し、浴室部増築以前には、主要部から下屋が張り出していたことが実証された。主屋15区・16区においては、土管やレンガ製の洗い場遺構など明治期以降の遺構を検出し、16区サブトレンチにおいては、18世紀後半以降の遺構と推測される。石列・瓦列遺構を検出した(32頁第25図)。主屋14区においては、土坑群を検出し、おおよそ2つの時期に分かれるようである(33頁第26図)。主屋13区からは、石列遺構③と溝状遺構を検出した(33頁第27図)。

第三面は、隠居棟浴室部と、主要部を第二面の状況からさらに掘り下げ、遺構を検出した状態である。検出した遺構は、基礎跡と考えられる遺構で、主要部現建物の栗石地業検出状況と似た土坑もある(35頁第29図・36頁第30図)。遺構を掘り込んでいる土層からは、18世紀後半ごろのものと考えられる遺物を検出している。(45頁第35図121)

第四面は、主要部21区・22区を第三面の段階からさらに掘り下げた状況である。遺物がわずか2点と少なく時期を判断することはできないが、18世紀後半以前の可能性があることは言える。まず溝状遺構SD-1が掘り込まれ、それを拡張するようにSD-2が掘り込まれている。この遺構の埋没後、22区検出の土坑は掘り込まれ、同じく、埋没後に掘り込まれたと考えられる土坑が21区においても確認されている。

第2節 まとめ

今節において、長屋門発掘調査結果、主屋・隠居棟発掘調査結果それぞれ検討し、まとめとしたい。

長屋門発掘調査

これまでの報告から、長屋門の調査区における検出遺構は、2時期～3時期を想定できる。最も新しい時期は、現長屋門関連遺構で、現建物基礎やそれに付随する桂石(6頁第4図)、地鎮遺構と思われる土師器①～④(6頁第4図・19頁第14図)、SX-1(長屋門)(7頁第5図)・SX-2(長屋門)(7頁第6図)である。長屋門建築の文久元(1860)年～近現代までの遺構である。1つ古い段階の遺構と考えられるものは、帯状石列遺構(9頁第9図)、門部硬化面と石列遺構(12頁第12図)である。2段階もしくは、3段階古い遺構としては、4区サブトレンチ検出の石列状遺構(10頁第10図)、8区石積み状遺構(10頁第11図)である。門部から検出した石列遺構は、13頁の「—長屋門石塀について—」のところで検証したように、石塀は、現長屋門に直行せず、約3度ずれる。その石塀の向きと面が石列遺構とほぼ揃うことから、北側石塀との関連性が指摘されている。また、石列遺構は帯状石列に直行することから帯状石列も一連の遺構の可能性が指摘されている。門部検出の硬化面は、時期的には、石列遺構とほぼ同じ時期と想定され、東側へ傾斜することや、非常に硬質であることから、旧路面の可能性が考えられる。現長屋門以前に、長屋門またはそれに類する建物があったことが判明しているため、これら一連の遺構は、その建物の遺構の可能性もある。4区サブトレンチ検出の石列状遺構は、検出範囲が非常に狭いため、断定は不可能であるが、帯状石列遺構との関連性が想定できる。8区サブトレンチ検出の石積み状遺構は当初、帯状石列遺構との関連性が考えられたが、平面図では帯状石列遺構の向きと平行にならず土層でも、帯状石列を埋め込んだ第Ⅲ層上面に帯状石列遺構が乗っている可能性が指摘できることから(5頁第3図)、石積み遺構は帯状石列遺構と伴わないものと考えられる。また、石積み状遺構、最上段の並びのラインを直線状に伸ばすと、4区の石列状遺構がほぼこのライン上に乗るようである。だが、4区と8区とでは距離がある上、間を繋ぐ遺構は未確認である。よって、一連の遺構と考えるのは難しい。これらのことから、長屋門調査区においては、2時期～3時期を想定す

るものである。しかしながら、問題点もある。8区のスブトレンチにおいて確認した第IV層は、門部まで広がる可能性がある土層である。5頁の第3図B-B'土層図を見ると、帯状石列遺構がこの第IV層と想定した層中に見られることが分かる。先ほど、8区の石積み状遺構の所でも触れたが、帯状石列遺構は、第III層上面に分布している可能性がある。帯状石列遺構が第III層上面に分布しているのであれば、第IV層と想定している門部の硬化面は、第IV層ではなく第III層より新しい土層となる。いずれにしても、現状ではこれらの問題を解決するのは不可能である。よって、上記で述べた2時期～3時期を想定するに留める。次に、造成の時期についてである。第I層を除去後、基礎石を撤去していただき、その後、6区と8区においてスブトレンチを設定し掘削を行った。両トレンチからは瓦や陶磁器などの遺物が出土した。相対年代が判明したもので最も古い遺物は焼塩壺(21頁第16図56)で1674年～1682年頃であるが、他には18世紀後半頃から19世紀初頭を推定できる遺物がある。このことから、その頃に現状に近い状況まで造成が行われたことが推測される。

主屋・隠居棟発掘調査

これまで報告してきた調査結果を検討した結果、主屋・隠居棟の調査区においては、6時期想定される。最も新しい第6期は、昭和5(1930)年建築の主屋に関連する遺構(28頁第20図)で、建物基礎とそれに関連する造成土(25頁第18図)である。第1a層と分類した土層がそれである。23頁第3章の第1節主屋・隠居棟土層体積状況の所で述べたように第1a層は、少なくとも3時期に分層できる可能性があるが、はっきりと分層できなかつた。ここで扱いたいのは、主屋建築時の造成土である。それ以下は、第5期に分類できよう。

第5期は明治期から昭和5年頃までの遺構で、明治35(1902)年増築の浴室部建物の基礎(28頁第20図)や造成土である第1b層(26頁第19図)、主屋15区検出の土管①・②(32頁第25図)、主屋16区検出の洗い場遺構とコンクリート遺構(32頁第25図)、主屋13区検出の石列遺構①と溝状遺構(29頁第22図)、14区検出の石列遺構②と土坑1(SX-3)・土坑2(SX-4)・土坑10(SX-12)、土坑16(P-1)・土坑17(P-2)(33頁第26図)が第5期に分類できよう。一旦ここで、浴室部における造成工事の工程を復元してみたい。同層の観察からも建物が増築であることを確認できた。解体修理に伴う調査において、浴室部増築以前には、主要部から下屋が張り出していた可能性が指摘されていた。今回の発掘調査において、主要部の下屋の基礎跡と考えられるSX-1(31頁第24図)と、雨落ちと考えられる遺構(31頁第24図)を検出した。土層の状況を見ると(26頁第19図)、雨落ち遺構を堺に主要部が1段高くなっていた可能性が指摘でき、主要部と浴室部が接続するあたりから(19区東側)、一旦1段低い面に合わせるように整地を行った可能性が考えられる。次に大便所の配管(海側へ伸びる管)を埋設後、建物の外壁を支える長方形の基礎石を据えていることが理解できる。建物内にある程度土を充填してから、それを掘削するかたちで柱を乗せる方形の礎石や風呂から大便所へ続く配管、小便所から大便所へ通ずる配管を埋設している。その後、便所と押入れの空間を構成する長方形の礎石を据えた後、礎石の石材をこの場で加工したことが伺える多量の礫片と土を充填している。さらに地表面は建物解体の際に撤去されていたが、漆喰によって整えられていた。なお、焚き口に関しては、解体修理の前の段階で幾度か改修を受けているとの事であり、建築当初の状況は不明とのことであつた。

第4期は、万延元(1860)年建築の主要部建物関連遺構で、建物の地鎮遺構と考えられる土師器No.1～No.4(28頁第20図・42頁第32図)、主要部の基礎(建築後新しく入れられたコンクリート等の基礎は除く)(28頁第20図)と造成土である第1c層(25頁第18図・26頁第19図)、主要部建物の基礎石撤去後に検出した栗石地業(31頁第24図)、浴室部増築前に建物から張り出していたものと思われる、下屋の基礎跡と考えられるSX-1と雨落ち遺構である。埋め甕遺構(29頁第21図)は、この4期かもし

くは3期と考えられる。

第3期は、第三面検出の建物基礎跡と考えられる遺構群(34頁第28図・35頁第29図・36頁30図)と主屋16区サブトレンチより検出した石列・瓦列遺構(32頁第25図)、主屋14区より検出した、土坑1(SX-3)・土坑2(SX-4)・土坑10(SX-12)、土坑16(P-1)・土坑17(P-2)を除く土坑群、いずれの遺構も第Ⅱ層に分類した層中より検出した。主屋13区より検出した石列遺構③については、この3期に分類できるものと考えられる。土層では、第Ⅱ層がこの3期の造成土と考えられる。第三面検出の遺構を掘り込んでいる土層から、18世紀後半頃の遺物を検出している。(45頁第35図121)よって3期と考えられる遺構は18世紀後半以降から万延元(1860)年頃までの遺構と考えられる。

第2期は、主要部22区より検出した遺構で、SX-30・SX-31・SX-32(37頁第31図)がこの2期である。第Ⅲ層から掘りこんだ遺構である。土坑からは遺物の出土はない。上層との関係から18世紀後半以前であろう。また、主要部21区において検出した土坑SX-33・SX-34・SX-35もSX-32と同様、平面形は楕円であり埋土の色調も似ているようである。したがって、21区検出の土坑は22区と同様に第Ⅲ層を掘り込んだ遺構であったのかもしれない。

第1期は、地山層を掘り込む形で構築された溝状遺構のSD-1とSD-2(37頁第31図)で、SD-2はSD-1を拡張する形で構築され21区から22区に連なる遺構である。埋土である第Ⅲからは、土器と陶器の破片が2点出土しただけであるので、構築年代は不明である。

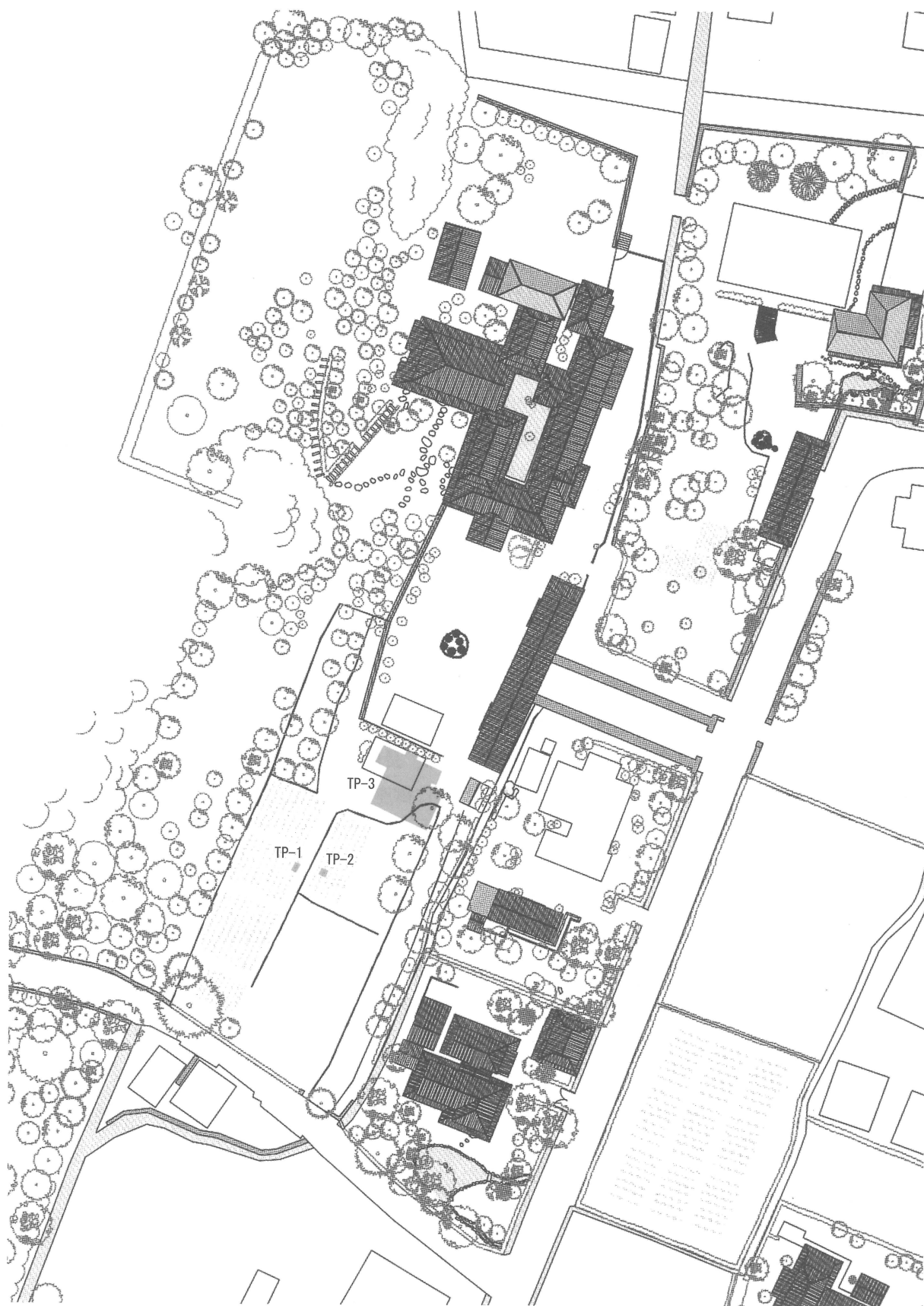
以上が、調査結果から想定できる変遷である。今回の発掘調査において、屋敷地は第四代鍋島嵩就の時代に一度に現状の広さと高さになった訳でなく、最低でも6回の造成を繰り返した結果であることが判明した。長屋門の調査結果と照らし合わせると、主屋・隠居棟調査区でいう第4期の時期に長屋門は建築され、第二面検出の遺構や6区・8区のサブトレンチにおいて確認した第Ⅰ層より下層の造成土は、主屋・隠居棟調査区でいう第3期とさほど変わらない時期ではないだろうか。いずれにしても、現状とさほど変わらない敷地の広さとなったのは、第3期の時期といえるだろう。第8代鍋島茂興(1699～1764)の晩年頃～第13代鍋島茂坤(1823～1850)頃が、第3期の時期と考えられ、第14代鍋島茂元(1830～1863)が、第4期となり隠居棟主要部、長屋門を建築している。第16代鍋島桂次郎(1860～1933)が、第5期となり、浴室部の増築、さらに御座敷の建築、第6期の主屋を建築、長屋門に北下屋部を増築し、鍋島陣屋跡は、ほぼ現在の姿となる。(竹田)

【参考文献】

- 大橋康二 1989『考古学ライブラリー55 肥前陶磁』ニューサイエンス社
大橋康二 2004『世界をリードした磁器窯・肥前窯』シリーズ「遺跡を学ぶ」005 新泉社
九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年—九州近世陶磁学会10周年記念—』九州陶磁学会
国見町教育委員会 2003『神代小路』国見町神代小路伝統的建造物群保存対策調査報告 長崎県国見町教育委員会(現雲仙市教育委員会)
児玉幸多監修 品川区立品川歴史館編 2004『江戸大名下屋敷を考える』雄山閣
桜井準也 2006『ガラス瓶の考古学』六一書房
澤井聖一 2011『建築知識』2011年11月号 株式会社エクスナレッジ
下出源七編 1976『建築大辞典』彰国社
高橋洋二編 1988『古伊万里』別冊太陽No.63 平凡社
辻田直人・村子晴奈 2010『鶴亀城(神代城)跡』雲仙市文化財調査報告書 第9集 長崎県雲仙市教育委員会
平井聖・鈴木解雄 1997『日本建築の鑑賞基礎知識—書院造から現代住宅まで—』至文堂
森本伊知郎 2009『近世陶磁器の考古学—出土遺物からみた生産と消費—』椋山女学園大学研究叢書35 雄山閣

【付録】-平成 18 年度の調査報告-

ここでは紙面を借り、平成 18 年度に行った調査を報告する。今回の調査成果を補足するものである。



第 36 図 平成 18 年度の調査区配置図

①調査に至る経緯（第 36 図）

平成 18 年度において、鍋島陣屋跡南側の畑地及び既存の納屋部分に公衆トイレの建設（市単独事業）、また、そのさらに南側畑地に個人住宅の建設が予定された。公衆トイレの建設に際しては、新たに浄化槽を埋設する部分、及び建物の基礎により地下の埋蔵文化財に影響があると考えられる部分について発掘調査を実施した。個人住宅については、木造で地下の埋蔵文化財への影響はほとんど考えられなかったが、便槽埋設部分について調査を実施している。公衆トイレに伴う調査範囲は、長屋門からわずか 5m ほどで、やや西側、鶴亀城（神代城）跡に近い位置である。個人住宅に伴う調査はそこから西南に 10m ほどの位置に 3m 程の間隔で 2 箇所行った。いずれの調査坑も掘削可能な深さまで調査を行い、最下層と考えられる基盤層（第 8 層）まで検出している。

第 36 図に示すとおり、今回報告する長屋門調査部分に近接するもので、土層堆積や出土遺物の時期等ほぼ同様の成果が見られる。特に、平成 18 年度調査では、神代鍋島家以前の中世神代氏時代の痕跡が検出されていることに重要な成果がある。鍋島陣屋跡の場所は、神代氏時代の居城「鶴亀城（神代城）跡」の「堀」部分に当たると考えられる。今回の長屋門や主屋等の調査では調査区の兼ね合いから、最下層までの掘削に及ばなかったが、ここで報告する平成 18 年度の 3 箇所の調査区は、いずれも最下層まで調査を行うことができおり、重要な成果を付け加えることができる。

②調査方法（第 36 図）

調査は、公衆トイレ浄化槽埋設予定地には 6m×8m の調査坑を設定し行った。ただし、検出された遺構等の全容を確認するため、北側に大きく調査区を拡張している。調査坑内の掘削は、最上層の現地表面である表土を重機により 20cm ほど掘削し、それ以下の掘削は、遺構面検出・遺構の掘り下げ・包含層掘削等全て人力で行った。遺構については可能な限り平面図及び断面図を作成した。遺物は基本的に同一層及び遺構一括で取上げ、部分的には実測図の作成を行っている。個人住宅便槽埋設予定地は、事務所用と居住区用の 2 箇所に設置されるため、1.5m×1m、1m×1m の 2 箇所の調査坑を設定し、地表面より人力で掘削を行った。遺物は基本的に同一層及び遺構一括で取上げ、調査坑壁面の土層実測図を作成した。

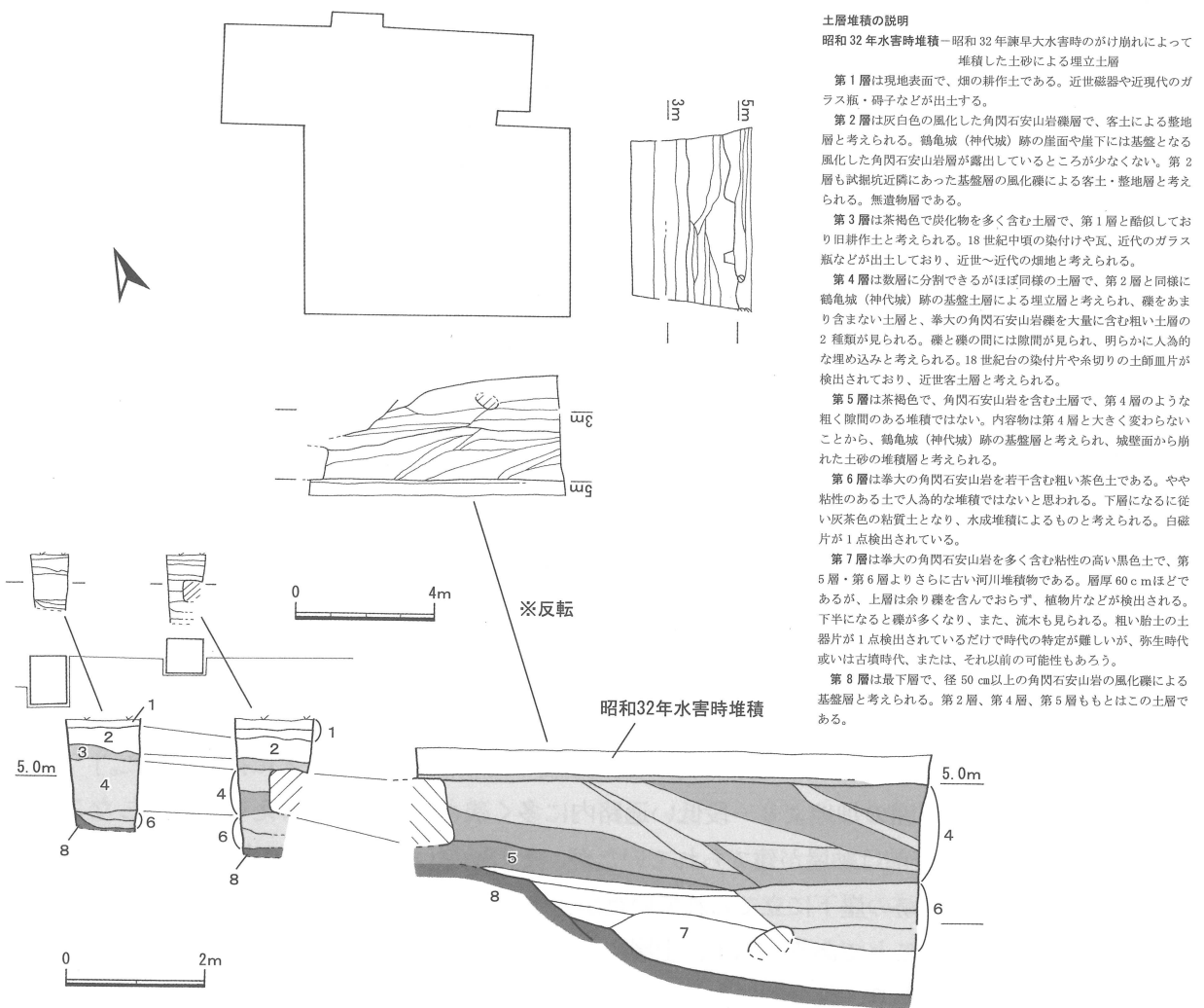
今報告では 3 箇所の調査坑の表記について、個人住宅に伴う調査坑を TP-1、TP-2。市単独事業の公衆トイレ建設に伴う調査坑を TP-3 と呼ぶことにする。

③土層堆積状況（第 37 図）

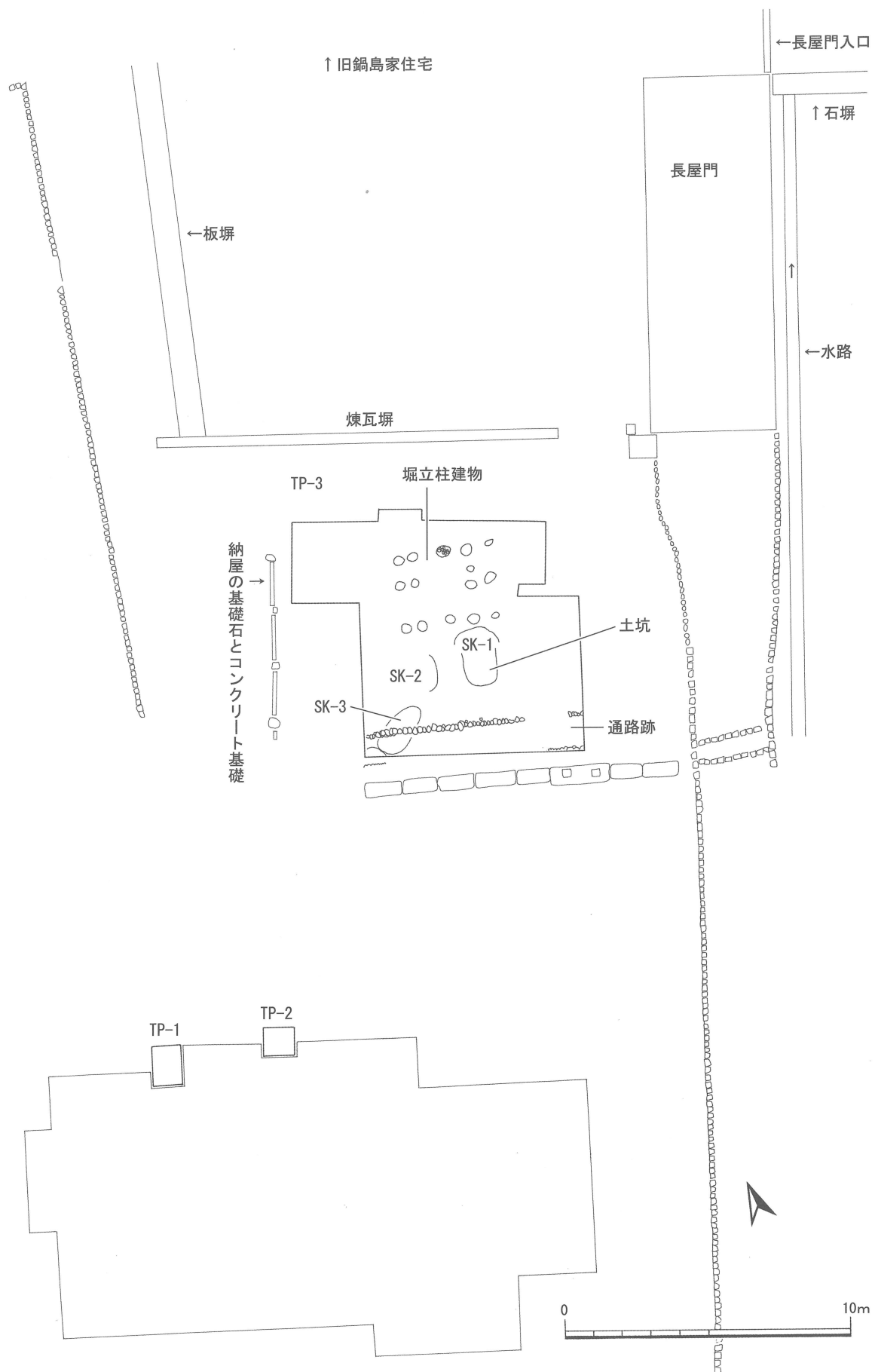
図中に土層の詳細を記載しており、ここでは土層堆積の概要を述べる。また、土層の堆積状況から読み取れる当時の環境や人々の行動なども合わせて検討する。

調査において検出された土層は大きく区分して 9 層検出されている。TP-3 では土層図の最上面に昭和 32 年の諫早大水害時に、鶴亀城（神代城）跡の崖面から崩れ落ちた土層が検出されている。3 箇所の調査坑ではその堆積層がはっきりと検出されたのは、後述する TP-3 の石列を伴う通路内のみであったため、一連の土層とは区分しており、土層の表記では第 8 層までとなっている。この土層については地区の古老によると、「水害時、崩れた崖の土の処理のため、周囲の畑などに押し広げた。」とのことで、その際の土が周囲の畑地より一段低い通路内に多く残されたものと考えられる。ちなみに、TP-3 については、調査前は納屋が建てられていたが、その納屋は昭和 32 年の水害時には、もっと西側の鶴亀城（神代城）跡の崖下に立てられていたが、水害時崖崩れの土砂に押しされ傾いてしまったので、立て直した、とのことである。以下、土層について見ていきたい。TP-1・TP-2 の場所と TP-3 では土層の内容に違いがあり、部分的に欠如しているところもあるが、そのほとんどは図のとおりに対応できる。なお、TP-3 の土層図については対比しやすくするため反転表示している。年代の古い順に

みていくと、第8層はいずれの調査坑でも検出されており、基盤となる角閃石安山岩の風化礫層である。年代的には数万年をさかのぼる堆積層となり、鶴亀城（神代城）跡の比高さ 8m~15mの崖面はこの第8層が露出している。第7層は粘性の強い河川堆積層で、流木などの植物遺体も見られる。遺物は摩滅した胎土の荒い土器片が検出されており、弥生時代以前の遺物と考えられる。武家町内の他の調査においても、河川堆積層と考えられる土層から弥生時代や古墳時代の土器片の検出が見られ、鶴亀城（神代城）跡東側は、中世神代氏以前からみのつる川の自然流路が存在していたことがうかがえる。第6層も同じく河川堆積層であるが、白磁片など中世と考えられる遺物が見つかっており、神代氏時代の「堀」跡と考えられ、既存の自然流路を活かして城の防御を行っていたと考えられる。この第6層はすべての調査坑で検出されているが、前述の第7層は TP-3 のみの検出である。TP-1・TP-2・TP-3 の順に城跡の崖面から離れていくことから、自然流路の最深部はさらに東側にあると考えられ、次第に土砂の堆積で埋まっていく様子がわかる。第5層は河川堆積層のような砂礫や粘土質の土層は見られず、第8層の角閃石安山岩の風化土が堆積したものである。城から離れるにしたがって薄くなり、やがては検出できなくなる。また、TP-3 のみの検出であり、部分的な堆積層と考えられ、鶴亀城（神代城）跡からの崖崩れなどによる堆積層であろう。土層の内容物は、前述した昭和 32 年水害時のものと良く似ており、そのこともそう判断した理由の一つである。第4層は最も厚い堆積層であるが、これまでの土層と明らかに違い、人為的な土層である。第37図や図版 25 などからも礫を

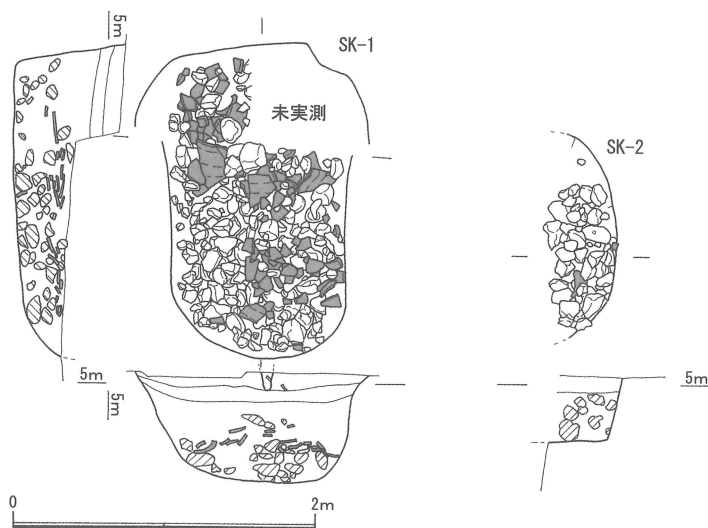


第37図 平成18年度調査時土層図 (1/200・1/100)



第 38 図 平成 18 年度調査検出遺構配置図 (1/200)

多く含む層やそうでない部分など、モザイク状の土層体積を示す。また、礫の多い部分の土層についてはかなり隙間も見られ、一気に埋め込んだことが予想される。また、TP-3の土層図を見ると、左から右、すなわち鶴亀城（神代城）跡側からの一方的に埋め込まれている様子がうかがえる。第4層の内容物は第8層とほぼ同様であり、堆積の状況から考えて、鶴亀城（神代城）跡の崖面を削り取り埋め込んだものと思われる。この土層が神代鍋島家による武家町神代小路の埋立跡と考えられる。当初、小路地区のすべてを埋立てて武家町を造成したとの憶測もあったが、近年継続的に行っている、小路地区内の調査では、TP-1～TP-3と今回の調査でしか第4層は検出されていない。一昨年の小路地区中央での調査（辻田 2010）では地表面から50cmほどで、河川堆積層と考えられる砂礫層や粘土層が検出されている。また、その周囲でも同様である。このことから神代鍋島家による小路地区の埋立造成は、鶴亀城（神代城）跡東脇の自然流路（中世神代氏時代の「堀」跡）部分を中心に行われたと考えられ、武家町神代小路の大半は、みのつる川の水成堆積による中州状の土地を活用したものと考えられる。もちろん、現在のみのつる川の護岸等の整備も必要であり、地区全体の埋立が行われていないにしても、かなり大規模な造成工事が行われたのは間違いない。第4層は上面がほぼ水平に整えられており、ただ単に自然流路（神代氏時代の堀跡）を埋め立てただけではなく、陣屋の造成を目的として計画的に整地されたものと考えられる。第4層表面では土坑（SK-1～SK-3）が検出されているが、土坑最上面の土層は周囲の第4層の土と同じもので蓋をしたように埋められており、掘り込み面での遺構検出ができなかった。このことから第4層上面で一度陣屋の建設及び整備を行ったことが推測できまいか。また、この第4層で気になる部分がある。それはTP-2とTP-3にみられる大きな礫である。TP-2とTP-3は10mほど離れており同じ礫ではないが、いずれも巨礫の下面が第6層や第5層の自然堆積層の直上に接している。そして、上面は平で、第4層の上面と一致する。TP-2発掘時には埋立時の土中に入っていたものと考えたが、TP-3発掘の時点では、造成時にただ単に混入した礫ではなく、人為的に配置されたものではないかと考えた。上面下面ともに第4層の上面下面と一致する2個の巨礫の存在は単なる偶然であろうか。あくまでも推測でしかないが次のように仮説を立ててみる。『この2個の石は「神代鍋島家による小路地区（特に鍋島陣屋跡）埋立造成の基点となる石」と考えられる。造成を行う際、現地の測量を行い盛土の高さの目安とするために幾つか基点となる礫を配したうちの2つであろう。TP-1～TP-3の土層図の比較から第4層上面の高さはほぼ同じ高さでそろえられており、埋立造成時にただ適当に土を搬入するのではなく事前の測量作業を的確に行い、計画的に工事を行っていることが伺える。』鍋島陣屋跡は武家町小路地区より1.5mほど標高が高い。ただ単に自然流路を



第39図 土坑実測図 (1/50)

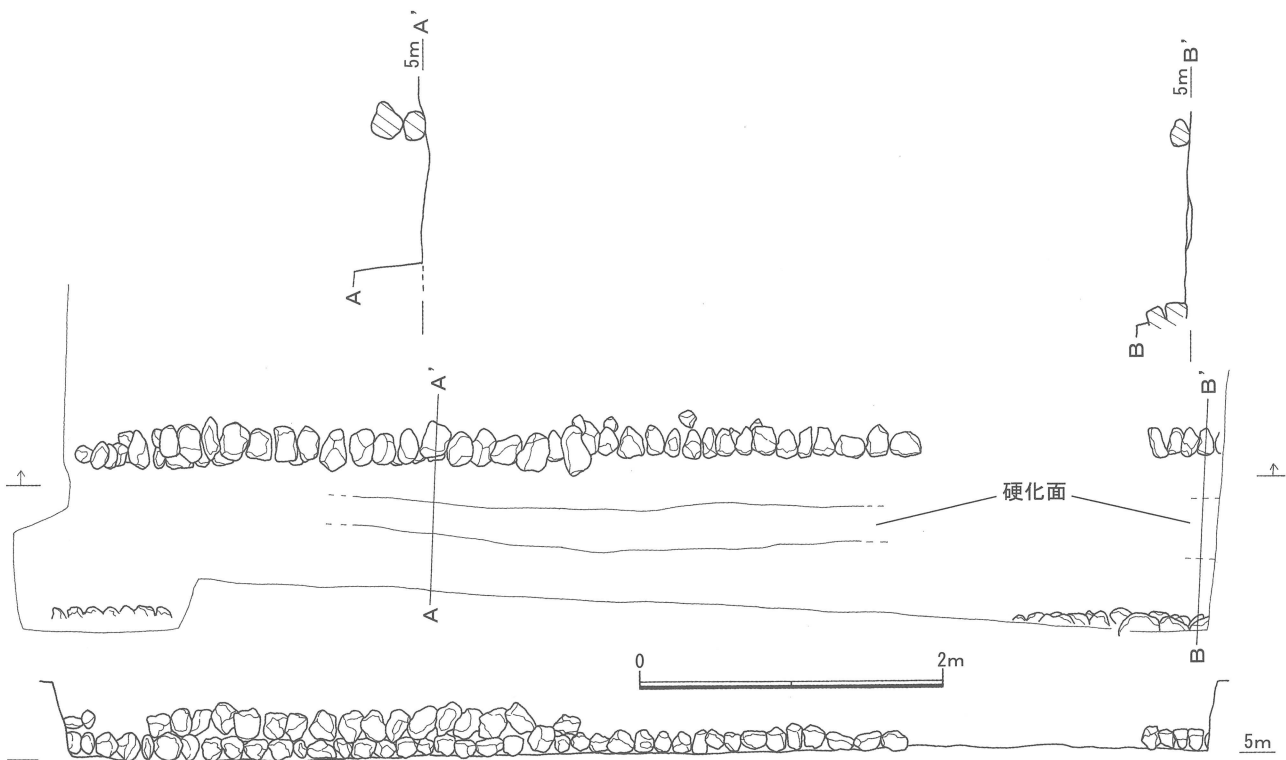
埋立てただけではなく、平に整地し、その上に陣屋の建物群を建設しており、高い土木技術が必要と考えられる。2つ配された巨礫は、当時の高い土木技術の一端を垣間見ているのかもしれない。第3層は畑の耕作土で、出土遺物から中世～近代までの使用が想定される。第2層・第1層はTP-1・TP-2で検出され、第2層は第8層の風化礫を利用した客土で、その上層の第1層は近代～現代までの畑の耕作土である。

④検出された遺構の概要（第 37 図～第 42 図、図版 23～図版 25）

TP-1、TP-2 については、調査面積が狭小であり遺構の検出にいたらなかったが、TP-3 については多くの遺構が検出された。まずは概要を述べる。

第 37 図に遺構の配置図を掲載している。土坑 3 基、掘立柱建物、通路跡石列が検出されている。土坑及び石列（通路跡）については第 4 層上面での検出で、掘立柱建物はその上層の畑の耕作土中と考えられ、やや後から作られたものと考えられる。

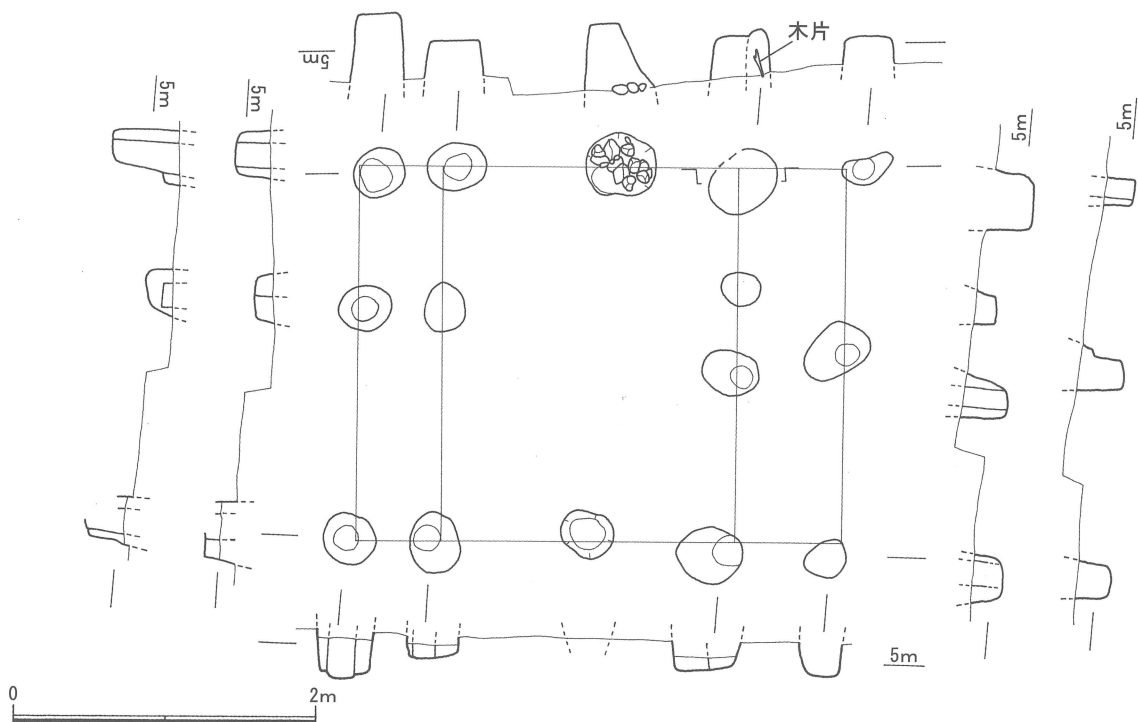
土坑：3 基の土坑は第 4 層上面からの掘り込みで、内部に礫や瓦を大量に廃棄しているものが 2 基（SK-1・SK-2）、15cm ほどの浅い掘り込みのもの（SK-3）が 1 基ある。いずれの土坑も内部の土層の最上面を周囲の第 4 層の土層と同様の土で整地しており、第 4 層上面では検出できなかった。SK-3 は後述する石列（通路）除去後に検出されており、石列（通路）を作る以前の遺構である。第 4 層が客土であることから、遺構の検出できなかった部分から一気に下層まで掘り込んだ際に初めて検出された。図版 24 でも判るように SK-2 はその大部分を 4 層掘削時に破壊してしまっている。ここでは残存状況のよい SK-1 について紹介する。第 39 図を見ると、検出時のプランは長軸 2m、短軸 1.5m の隅丸長方形で、深さは 0.7m を測る。土坑の南側半分以上は 4 層上面での検出ができず、土坑内の上層の遺物や礫の少ない部分を掘りすぎており本来の掘り込みプランは検出できていない。内部の土層は最上層が第 4 層である客土と同じ土を入れ込んで整地してあり、検出は困難であった。土坑の深さの半分ほどから底までは礫と瓦と若干の染付け・鉄釘などが検出される。断面図でも判るが、先に礫を入れ込んでその上に瓦を入れている。検出された状況から不要物の廃棄土坑と考えられる。掘り込みプランを検出できないことや、土坑内部の埋め土に第 4 層上面の整地層と同じものを使用していることなどから、第 4 層による造成直後に掘り込まれ、すぐに埋め戻されたものと考えられる。第 4 層埋立造成に伴って整備された陣屋の廃棄物の廃棄土坑であろうか。



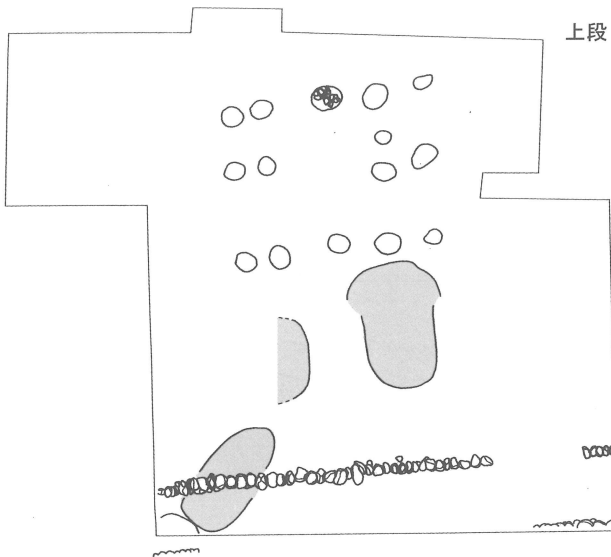
第 40 図 通路跡石列 (1/50)

通路跡石列：第40図は調査坑の最も南よりで検出され、一部は調査坑外に続いている。第4層上面に直接礫が接しており、第4層造成後それほど期間が経たない間に作られたものか。人頭大の礫を2段に重ねたもので1mの間隔をあけて平行に並ぶ。石列内の4層上面には薄く黒色土が検出されており第3層の畑の土が流入したものと考えられる。石列内部には水成堆積層などは見られず「水路等」の水利関連の施設ではなく、畑の境界及び通路と考えられる。石列内中央部の4層上面にはレンズ状に窪んだ硬化面が部分的に検出されることもその根拠となろう。頻りに人の往来があったためと考えられる。従って、石列は第3層の畑地を造成する際にその境界及び通路として作られたものであろう。また、石列内部は昭和32年水害時の土砂や礫で充填されていることから、少なくとも昭和32年までは存続していたと考えられる。このことは古写真（図版2）からもその状況が見て取れる。昭和22年米軍撮影の航空写真にはその痕跡と考えられる筋状の部分が見て取れる。

掘立柱建物：第41図は2間×2間で東西方向に庇状の張り出し部分を持つ構造である。調査当初第4層上面で最も南側の柱列が検出され、土坑（SK-1他）と同じ時期のものかと考えたが、柱穴内部の土質が大きく違う為、さらに上層からの掘り込みと想定して、柱列の延長すると思われる部分に調査坑を拡張し、検出を試みた。その結果第3層を掘削時に柱穴を検出することができた。おそらく第3層（畑地）堆積後のものであろう。このことは前述の石列との関係からも推測できる。掘立柱建物の東西方向の軸は石列の軸と平行しており、掘立柱建物建設の際には石列の向きにあわせて作られたものと考えられる。石列は第3層の畑地造成時に作られていることから、掘立柱建物はその後の建築であることが判る。昭和22年航空写真（図版2）には写っていないことから、太平洋戦争終結前までには取り壊されていることも判る。また、「戦前は一面の畑であった」との地区内の古老の証言もある。柱痕跡の中からは残存した柱材片も検出されており、それほど古い時期のものではないと考えられる。また、掘立柱建物は柱穴の深さや間隔がまちまちであることから、高床式のしっかりとした建物ではなく、畑の脇の納屋、或いは家畜小屋等がイメージされる。



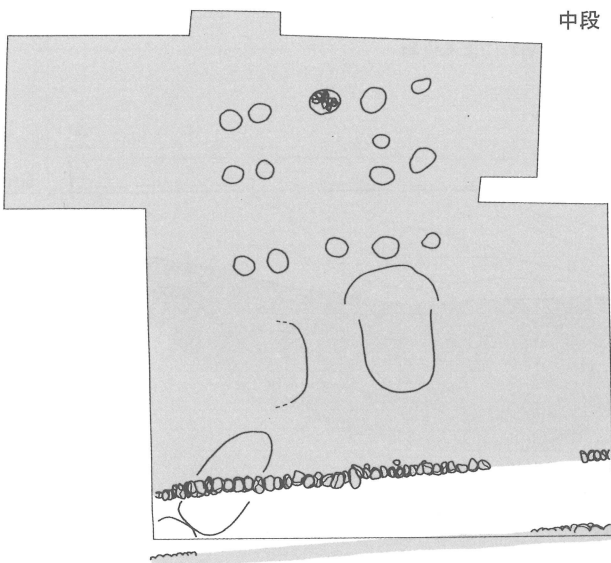
第41図 掘立柱建物 (1/50)



上段

第4層造成直後（18世紀後半か）

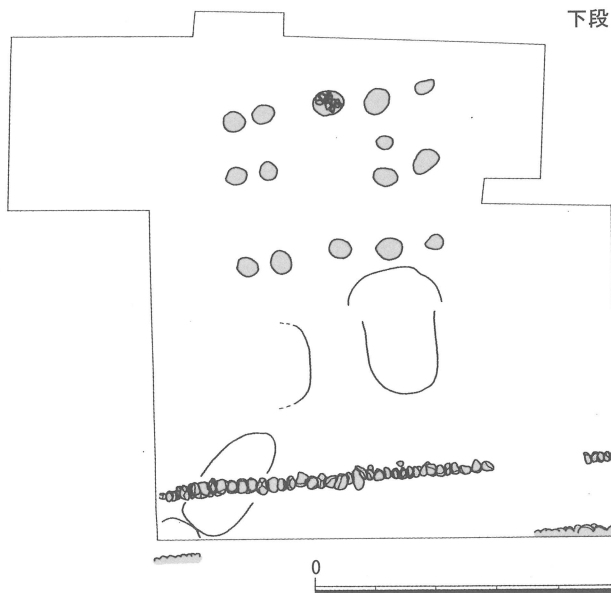
造成面を平らにならし、土坑を掘り込む。土坑内は瓦や礫、鉄釘などの瓦礫類で、土坑上面の埋土は造成面の上面と同様にきれいに「ならされ」、第4層上面での検出は困難なほどであった。



中段

造成後まもなく（18世紀後半～近代？）

第4層の上に盛土を行い、畑地として使用される。畑地を区分するように石列が築かれ、その間は通路として使用されていたと考えられる。通路中心部はかなり地面が硬くしまっている。また、石列の下端は第4層の上面に接しており、第4層造成後かなり近接した時期に築かれたものであろう。



下段

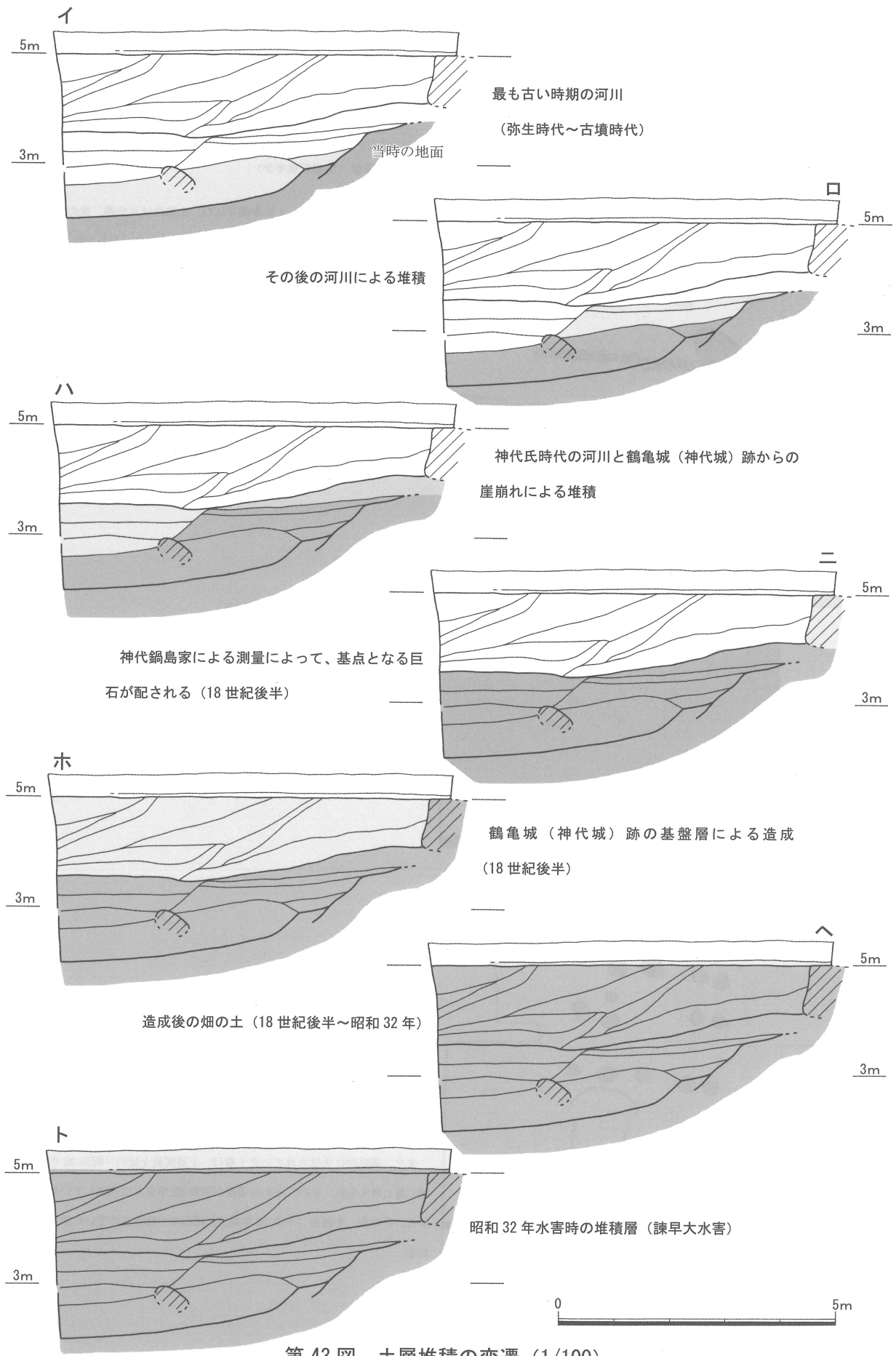
その後

その後、時期ははっきりとしないが、石列（通路）に並行するような掘立柱建物が建設される。近隣の古老の話などから、昭和期にはその建物はすでに解体されているようである。その後、畑や、古写真にある納屋などが周囲に作られるなど、時期によってさまざまな土地利用がうかがえる。

また、通路内に充填されていた土層は、土層図最上面の「昭和32年水害時堆積」層と考えられ、そのことから通路が昭和32年までは存続していたことがわかる。その後、今調査（平成18年度分）直前まで使用されていた納屋が移築される。

0 5m

第42図 検出された遺構の変遷



第 43 図 土層堆積の変遷 (1/100)

⑤ 検出された遺構や土層の変遷について（第 42 図・第 43 図、図版 2、図版 23～図版 25）

第 42 図に検出された遺構の変遷を示した。検出された遺構は大きく 3 期に分けられる。上段は第 4 層による造成直後の状況で、18 世紀後半頃もしくはそれ以降と推測される。埋立造成や陣屋の整備で不用となった資材等を廃棄する土坑が検出される。検出面はかなり水平にならされており、また、第 4 層上面は埋立造成に利用した第 8 層のなかでも、非常に礫が少ない「風化の進んだ部分」の土を選択して使用しているようで、非常に滑らかな印象である。おそらく造成後は地表面となっていたと考えられる。土坑の検出が困難なほど土坑内部の土質にも気を使っていることを考えると、たとえ陣屋敷地内の周縁部でも見栄えを気にして整備されている様子が想像できる。このころ前の世代の陣屋と長屋門が整備されていると考えられる。ここで土坑内の遺物を少し紹介する。土坑（SK-1）出土の遺物（図版 25）は、そのほとんどが近世の棧瓦である。染付けなども一部検出されており、概ね 18 世紀後半頃のものと考えている。瓦は軒の部分が検出されておりその特徴を記す。丸瓦部の文様は左巻きの三巴文で頭部は大きく尾部は短い。平瓦部は、中心飾りは先端が菱形となる一葉で、左右に 4 回転する唐草文である。1・2 回転目は中心飾りの下部から伸び、1 回転目が下向きなのに対し 2～4 回転目は連続して上向きとなる。現在の鍋島邸及び長屋門の瓦と比較したが同じ物は無い。また、邸内の隅に積まれている古い瓦の中にも見当たらない。土坑は埋立造成後かなり近い時期に掘削され、瓦礫を廃棄した後、またすぐに埋め戻されていることから、現長屋門や造成後の前の世代の建物とも考えられない。埋立造成前の旧陣屋建物の瓦の可能性もある。

中段は造成後しばらくして、畑地として利用されていた時期である。18 世紀後半から近代と考えられるが、通路跡の石垣は第 4 層上面に直接接しており、それほど時期が開いてはいないと考えられる。通路の中央部分にも人が歩いたためにできたと考えられる窪みと硬化面が検出され、陣屋敷地内の周縁部を畑地として利用していたことがうかがえる。

下段はその後、時期は不明だが、通路跡に並行するように掘立柱建物が作られる。建築時期も廃棄の時期も判然としないが、前述の古老の話などから昭和の初めには存在していない可能性もある。③土層堆積状況の冒頭でも述べたが、調査坑部分には調査直前まで納屋があり、その納屋は昭和 32 年の水害時に移築されたものである。図版 2 には移築前の状況を見ることができる。

このように検出された遺構の変遷から、調査地点の土地利用のあり方がよくわかる。18 世紀後半の陣屋整備期には、地表面の土質にまでこだわって造成工事を行った様子が見られ、神代鍋島家当主の屋敷としてふさわしいものとなるよう手を加えられていることがうかがえる。

第 43 図に土層堆積の変遷を示した。上から古い順に 7 段階の変遷を見ることができる。イの最も古い時期の河川堆積層からは流木などとともに、粗い胎土の土器片も出土しており、弥生時代～古墳時代ごろと考えられる。調査地点は、当初から中世神代氏時代の「堀跡」と想定されていたが、イの状況からもともとあった自然流路を利用した天然の「堀跡」であることが確認できた。弥生時代～古墳時代の土器片は神代小路地区内の調査でも下層部分からの出土が見られ、みのつる川上流に遺跡が存在することが伺える。ロ・ハとその後も河川堆積層が続くが、では、細片ではあるが、中世と考えられる白磁片が見つまっていることから、神代氏時代のものと考えられる。また、城崖面の崖崩れと考えられる土砂の堆積もみられる。ニ・ホが神代鍋島家による埋立造成と考えられ、年代的には 18 世紀後半ごろが予想される。ホの堆積はかなり短期間に行われたことが予想され、また、上面はかなりきれいに整地されている様子が伺える。廃棄土坑が掘り込まれ、その後畑の境界となる石列が作られる。へは畑の耕作土で、最後トは水害時のがけ崩れの土層堆積となる。本来はこの後にさらに畑の造成土などがあり、調査前に納屋が建てられる。

前述の遺構の変遷、上段・中段・下段は、土層堆積の変遷の中では、ホ～への時期にあたる。

⑥まとめ

これまでみてきたように、鍋島陣屋跡脇に位置する TP-1～TP-3 の成果（武家町「神代小路」地区内の数回の未報告調査分も含めて）から、以下のことが判明した。

- ・鍋島陣屋跡付近は、少なくとも弥生時代～古墳時代には河川（みのつる川）跡であった。
- ・中世神代氏時代の堀跡は、河川（みのつる川）跡を利用したものであった。
- ・武家町「神代小路」地区は、神代鍋島家による埋立造成によって作られたとされてきたが、地区内の大部分はみのつる川の河川堆積による中州状の土地で、神代鍋島家による埋立造成は、鶴亀城（神代城）跡の堀部分や、武家町周囲の護岸部分と想定される。
- ・埋立造成工事や陣屋の建設の時期は、第4代嵩就により行われ、元禄期には長屋門が作られたとされてきたが、少なくとも陣屋部分の埋立造成工事については18世紀以降、武家町についても同様と考えられる。

以上のように、鍋島陣屋跡や武家町神代小路の成り立ちについて多くの事柄が判明している。第4章まとめで竹田が詳細を述べている、長屋門及び主屋・隠居棟の調査成果からも、これらと矛盾しないものとなっている。まとめの中で、長屋門については現況に至るまで2～3時期、主屋・隠居棟については6時期の変遷をたどることが可能、と検討しており、現在の陣屋に近い状態になったのは主屋・隠居棟の第3期としている。土層堆積の変遷では、ニ・ホの時期、検出された遺構の変遷では上段から中段にかけてとなる。

冒頭でも述べているが、神代小路地区は神代鍋島家第4代嵩就によって、現在のようなまちなみの基礎が築かれたとされてきた。しかしながら近年の発掘調査の成果からはそのことを追認する結果とはなっていない。治水や農林業の奨励など、村の発展に大きく貢献し、礎を作ったのは第4代嵩就（一雲さん）によるもので、その後、18世紀台になり、発展した村に呼応するように、武家町神代小路地区のまちなみが形作られていったものと考えられる。では、江戸期の前半から中ごろにかけての陣屋はどのような様子であったのであろうか。そのことを端的に示す資料は今のところ不明であるが、木島孝之氏の調査（木島2003）や報告（木島2008）など、神代村が鍋島領へ移り変わるころの様子も近年判明してきている。今後、まちなみの内外や鶴亀城（神代城）跡などの調査や研究が進めば、武家町神代小路地区の変遷についてさらに判明すると期待される。

最後に、2010年9月23日、小路地区伝統的建造物群保存地区審議委員として指導いただいた、宮本雅明先生の訃報を聞いた。今報告の調査や小路武家町内の調査（辻田・村子2010）、また、現在調査中である、同じく武家町内の小路遺跡の調査。いずれも宮本先生の指導や助言がなければ実現しなかったものである。長屋門の調査開始2ヶ月前のことであった。発掘現場や調査成果を見たいいただくことはかなわなかったが、先生の意味が受け継がれ、今報告が神代小路保存地区の今後の整備に資することを期待したい。と同時に、先生のご冥福をお祈りいたします。

（辻田）

【参考文献】

- 木島孝之 2003「第2章 神代城と神代「小路」」2003 国見町教育委員会『神代小路』国見町神代小路伝統的建造物群保存対策調査報告 長崎県国見町教育委員会（現雲仙市教育委員会）
- 木島孝之 2008「神代城跡採集の沢瀉紋鬼板瓦が持つ意味」2008 城館史料学会『城館史料学』第5号 国見町 1984『国見町郷土史』国見町
- 神代を史ろう会 2009『神代鍋島家年譜』
- 辻田直人・村子晴奈 2010『鶴亀城（神代城）跡』雲仙市文化財調査報告書 第9集 長崎県雲仙市教育委員会
- 本田秀樹編 2002『森岳城跡』長崎県文化財調査報告書 第166集 長崎県教育委員会
- 宮本雅明 2003「第3章 神代小路の空間と景観」2003 国見町教育委員会『神代小路』国見町神代小路伝統的建造物群保存対策調査報告 長崎県国見町教育委員会（現雲仙市教育委員会）

第1表 長屋門出土遺物計測表

図番号	種別	法量 (cm)	技法の特徴	胎土/色調	文様	備考
14	1 土師器 (Ⅲ)	口縁部径 8.5 器高 1.6 底径 5.8	外面 回転ナデ 内面 ヘラ切り 底部 ヘラ切り	白色微粒子 内外面：浅黄褐色 (Hue10YR8/3) 内面：褐灰色 (Hue10YR4/1)、オリーブ黒色 (Hue5YR3/1) 見込み：褐灰色 (Hue10YR4/1)、光沢灰白色 (Hue10YR7/1)	見込み：鶴文の印版、輪宝	ロクロ
	2 土師器 (Ⅲ)	口縁部径 9.2 器高 1.9 底径 6.0	外面 回転横ナデ 内面 回転横ナデ 底部 ナデ調整	光沢微粒子 外面：にぶい黄褐色 (Hue10YR7/3)、褐灰色 (Hue10YR4/1) 見込み：光沢褐灰色 (Hue10YR4/1)	見込み：鶴文の印版	ロクロ
	3 土師器 (Ⅲ)	口縁部径 9.3 器高 1.7 底径 5.5	外面 横ナデ 内面 横ナデ 底部 ヘラナデ	光沢微粒子 外面：にぶい黄褐色 (Hue10YR7/3)、緑黒色 (Hue5G2/1) 内面：にぶい黄褐色 (Hue10YR7/3)、緑黒色 (Hue5G2/1) 内面：にぶい黄褐色 (Hue10YR7/4)、灰色 (HueN5/0) 見込み：光沢灰白色 (Hue10Y8/2) 文様：暗灰色 (HueN3/0)	見込み：鶴文の印版、輪宝	ロクロ
	4 土師器 (Ⅲ)	口縁部径 9.1 器高 1.8 底径 5.9	外面 回転横ナデ 内面 回転横ナデ 底部 糸切後ナデ	光沢微粒子、1mm程の礫 内外面：浅黄褐色 (Hue10YR8/4)、灰色 (HueN4/0) 見込み：光沢灰白色 (Hue10YR7/1)	見込み：鶴文の印版	ロクロ
	5 土師器 (Ⅲ)	口縁部径 8.9 器高 1.9 底径 5.5	外面 回転横ナデ 内面 回転横ナデ 底部 ヘラナデ	光沢微粒子、1mm程の礫 内外面：にぶい黄褐色 (Hue10YR6/4)、灰色 (Hue7.5Y4/1) 外面：暗灰色 (HueN3/0) 見込み：光沢灰白色 (HueN7/0)	見込み：鶴文の印版	ロクロ
	6 土師器 (Ⅲ)	口縁部径 9.4 器高 1.7 底径 6.0	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ 底部 糸切後ヘラ	光沢のある微粒子、1mm程の礫 外面：浅黄褐色 (Hue10YR8/3) 内面：浅黄褐色 (Hue10YR7/1) 内外面：灰色 (Hue2.5Y7/1)、明青灰色 (10BG7/1)	見込み：不明文	ロクロ
	7 土師器 (Ⅲ)	口縁部径 9.2 器高 1.5 底径 6.6	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ 底部 ミガキ	内外面：にぶい黄褐色 (Hue10YR7/3)、灰白色 (Hue10YR7/1) 暗灰色 (HueN3/0) 文様凹部：光沢灰白色 (Hue2.5Y8/2)	見込み：鶴文？の印版、 亀文？の印版	ロクロ
	8 土師器 (Ⅲ)	口縁部径 9.2 器高 1.8 底径 5.0	内外面 回転ヘラ削り 後ナデ 底部 ナデ後ヘラ	外面：浅黄褐色 (Hue2.5Y8/3)、灰色 (Hue5Y4/1)、 黒色 (Hue5Y2/1) 内面：にぶい黄褐色 (Hue10YR7/3)、黒色 (Hue5Y2/1)、銀色 灰黄褐色 (Hue10YR6/2)	見込み：鶴文の印版	ロクロ
	9 木札	最大長 11.7 最大幅 11.7 最大厚 1.0		灰黄褐色 (Hue10YR5/2)		
	10 木札	最大長 14.9 最大幅 3.0 最大厚 6.5		灰黄褐色 (Hue10YR5/2)		
15	11 土師器 (Ⅲ)	口縁部径 9.0 器高 5.8 底径 1.8	外面 横ナデ 内面 横ナデ 底部 糸切後ナデ	光沢のある微粒子、1mm程の礫 外面：浅黄褐色 (Hue10YR8/3)、暗灰色 (HueN3/0) 内面：灰黄色 (Hue2.5Y6/2) 見込み：黒色 (Hue7.5Y2/1)	見込み：鶴文の印版	ロクロ
	12 土師器 (Ⅲ)	口縁部径 9.2 器高 2.7 底径 6.3	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ 底部 糸切後ヘラ	1mm程の砂粒 内外面：浅黄色 (Hue10YR8/4)、灰白色 (Hue10YR8/2) 底部：暗灰色 (HueN3/0)、灰白色 (HueN7/0)	見込み：鶴文の印版	
	13 土師器 (Ⅲ)	口縁部径 8.4 器高 1.4 底径 5.0	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ 底部 糸切	内外面：にぶい黄褐色 (Hue10YR7/3) 見込み・底部：黄灰色 (Hue2.5Y4/1)		ロクロ
	14 土師器 (Ⅲ)	口縁部径 9.7 器高 1.9 底径 4.9	外面 回転横ナデ 内面 回転横ナデ 底部 糸切	1mm程の砂粒、光沢のある微粒子 内外面：浅黄色 (Hue10YR8/3) 見込み・底部：暗灰色 (HueN3/0)		
	15 土師器 (Ⅲ)	口縁部径 6.4 器高 1.1 底径 4.9	外面 回転横ナデ 内面 回転横ナデ 底部 糸切	金雲母 内外面：浅黄色 (Hue10YR8/4)		
	16 土師器 (Ⅲ)	口縁部径 11.1 器高 2.5 底径 5.9	外面 横方向ミガキ 内面 横方向ミガキ 底部 ミガキ	光沢のある微粒子 内外面：にぶい黄褐色 (Hue10YR6/4)、灰白色 (Hue2.5Y5/1)		ロクロ
	17 土師器 (坏)	口縁部径 16.0 器高 2.1 底径 8.8	内面 回転利用 横ナデ	光沢のある微粒子 外面：黒褐色 (Hue10YR3/1) 内面：にぶい橙色 (Hue7.5YR7/4) 見込み：灰黄褐色 (Hue10YR6/2)		
	18 焙烙	口縁部径 (復元) 16.0	内面 回転横ナデ	1mm以下の砂粒 内外面：にぶい橙色、にぶい褐色		斑点
	19 焙烙	口縁部径 15.5 器高 4.4 底径 14.4	外面 回転横ナデ 内面 回転横ナデ	外面：にぶい黄褐色 (Hue10YR6/3)、黒色 (HueN1.5/0) 内面：にぶい黄褐色 (Hue10YR7/4)、灰黄褐色 (Hue10YR5/2)		
	20 陶器鉢	口縁部径 20.2 器高 7.7 底径 9.4	外面 回転ケズリ	外面：にぶい赤褐色 (Hue5YR4/4)、黄灰色 (Hue2.5Y5/1) 浅黄色 (Hue2.5Y7/3) 内面：にぶい赤褐色 (Hue5YR4/4)		
	21 磁器 (火入?)	口縁部径 8.0 器高 4.6 底径 5.4	高台 回転ケズリ 底部 回転ケズリ	外面：灰白色 (Hue5Y7/2)、灰黄色 (Hue2.5Y7/2) 灰白色 (Hue2.5Y8/2) 内面：灰白色 (Hue5Y7/2)		ロクロ
	22 磁器 (火入?)	口縁部径 8.9 器高 4.3 底径 5.0		内外面：浅黄褐色 (Hue10YR8/3)、灰白色 (HueN8/0) 底部：黒色 (HueN2/0)		ロクロ
	23 染付磁器碗 (蓋)	口縁部径 (復元) 9.2 器高 2.8 つまみ径 (復元) 3.6		内外面：灰白色 (Hue7.5Y8/1) 染付：暗緑灰色 (Hue10GY4/1)、暗青灰色 (Hue5B4/1)	外面：葡萄文	ロクロ
	24 磁器碗	口縁部径 10.9 器高 5.9 底径 4.5	見込み 釉剥ぎ	外面：黄褐色 (Hue2.5YR5/6)、灰白色 (Hue2.5Y8/2) 灰白色 (Hue2.5GY8/1)、灰黄色 (Hue2.5Y7/2) 見込み：灰白色 (Hue2.5Y8/2)	外面：刷毛文	ロクロ
	25 磁器碗	口縁部径 11.3 器高 5.6 底径 4.5	見込み 釉剥ぎ	外面：黄褐色 (Hue2.5YR5/6)、灰白色 (Hue2.5Y8/2) 灰白色 (Hue2.5GY8/1)、灰黄色 (Hue2.5Y7/2) 見込み：灰白色 (Hue2.5Y8/2)	外面：刷毛文	ロクロ
	26 染付磁器碗	口縁部径 (復元) 10.0 器高 5.5 底径 (復元) 3.9	内外面 貫入	内外面：灰白色 (Hue10Y7/1) 疊付：灰黄色 (Hue2.5Y7/2) 染付：藍色	外面：蝶文、雲文	
	27 染付磁器碗	口縁部径 (復元) 10.3 器高 5.9 底径 (復元) 4.3	疊付 釉剥ぎ	内外面：灰白色 (Hue2.5Y8/1)、暗緑灰色 (Hue10GY4/1) 外面：透明青黒色 (Hue10BG2/1)、灰白色 (HueN7/0) 見込み：灰白色 (HueN7/0)	外面：圏線、葉文、格子文 内面：圏線	
28 磁器碗	口縁部径 8.5 器高 4.0 底径 3.0	内外面 貫入	内外面：灰オリーブ色 (Hue5Y6/2) 高台無釉部：灰白色 (Hue5Y8/1)			
29 磁器碗	口縁部径 7.2 器高 5.2 底径 3.0	内面 貫入 疊付 釉剥ぎ	外面：灰白色 (Hue2.5GY8/1)、明オリーブ灰色 (Hue2.5GY7/1) 内面：明オリーブ灰色 (Hue2.5GY7/1) 口縁部：暗オリーブ色 (Hue5Y4/3)			
30 磁器小坏	口縁部径 (復元) 7.2 器高 3.2 底径 (復元) 3.0		内外面：灰白色 (Hue10Y7/1) 染付：青色、明黄褐色 (Hue10YR7/6)	内面：富士山文、梅文	ロクロ	
31 磁器皿	口縁部径 (復元) 14.5 器高 4.3 底径 (復元) 8.4		内外面：灰白色 (Hue10Y7/1) 染付：明青灰色 (Hue5B7/1)、薄い明青灰色 (Hue5B7/1) 青黒色 (Hue5B2/1)	内面：山水文	ロクロ	
32 インク瓶	口縁部径 1.7 器高 5.0 底径 4.3		淡緑色半透明	底部：「サムライ☆」の陽刻		
33 土師器 (Ⅲ)	口縁部径 9.5 器高 1.7 底径 6.3	外面 横ナデ 内面 横ナデ 底部 糸切	内外面：にぶい黄褐色 (Hue10YR7/3) 見込み：黒色 (Hue2.5Y2/1) 文様部：黒色 (Hue2.5Y2/1)、光沢灰白色 (Hue2.5Y8/1)	見込み：鶴文の印版、 植物文の印版	ロクロ	
16	34 土師器 (Ⅲ)	口縁部径 (復元) 8.0 器高 1.7 底径 5.0	外面 回転横ナデ 内面 回転横ナデ 底部 糸切	1mm以下の小礫、金色微粒子 内外面：橙色 (Hue2.5YR7/6) 見込み：にぶい橙色 (Hue7.5YR7/4)		ロクロ
	35 土師器 (Ⅲ)	口縁部径 5.6 器高 1.5 底径 3.7	外面 回転横ナデ 内面 回転横ナデ 底部 糸切	雲母微粒子 内外面：にぶい橙色 (Hue7.5YR7/4)		ロクロ

図番号	種別	法量 (cm)	技法の特徴	胎土/色調	文様	備考	
16	36 土師器 (Ⅲ)	残存高 1.2 底径 5.8	内外面 回転横ナデ 底部 ヘラミガキ	2mm以下の礫、銀色微粒子 内外面：にぶい黄褐色 (Hue10YR6/4)			
	37 土師器 (Ⅲ)	口縁部径 (復元) 8.8 器高 2.0 底径 (復元) 5.6	外面 回転横ナデ 内面 回転横ナデ 底部 糸切	2mm以下の赤色粒、1mm以下の礫、1mm以下の金色微粒子 内外面：にぶい橙色 (Hue7.5YR7/4)		ロクロ	
	38 土師器 (Ⅲ)	口縁部径 7.6 器高 1.7 底径 4.4	外面 回転横ナデ 内面 回転横ナデ 底部 糸切	2mm以下の赤褐色粒、2mm以下の礫、1mm以下の金色微粒子 内外面：にぶい橙色 (Hue7.5YR7/4)、黒色 (HueN2/0)		ロクロ	
	39 土師器 (Ⅲ)	口縁部径 7.8 器高 1.7 底径 4.0	外面 回転横ナデ 内面 回転横ナデ 底部 糸切	1mm以下の礫、金色微粒子 内外面：浅黄褐色 (Hue7.5YR8/4)、黒色 (HueN2/0)		ロクロ	
	40 土師器 (Ⅲ)	口縁部径 6.1 器高 1.6 底径 3.3	外面 回転横ナデ 内面 回転横ナデ 底部 糸切	2mm以下の赤色粒、2mm以下の礫、金色微粒子 内外面：にぶい橙色 (Hue7.5YR7/4)		ロクロ	
	41 土師器 (Ⅲ)	口縁部径 (復元) 7.2 器高 1.8 底径 (復元) 3.6	外面 回転横ナデ 内面 回転横ナデ 底部 糸切	1mm以下の赤褐色粒、2mm以下の礫、金色微粒子 内外面：にぶい橙色 (Hue7.5YR7/5)		ロクロ	
	42 土師器 (Ⅲ)	口縁部径 (復元) 7.2 器高 1.4 底径 (復元) 3.0	外面 回転横ナデ 内面 回転横ナデ 底部 糸切	銀色微粒子 内外面：にぶい浅黄褐色 (Hue7.5YR8/4)、灰白色 (Hue10Y8/2) 外面：黒褐色 (Hue10YR8/2)		ロクロ	
	43 土師器 (Ⅲ)	口縁部径 (復元) 8.5 器高 1.7 底径 6.0	外面 回転横ナデ 内面 回転横ナデ 底部 ヘラミガキ	1mm以下の礫、銀色微粒子 内外面：にぶい黄褐色 (Hue10YR7/3)、暗灰白色 (HueN3/0)	見込み：鶴文?の印版、 亀文?の印版	ロクロ	
	44 土師器 (Ⅲ)	口縁部径 (復元) 8.0 器高 2.0 底径 (復元) 4.6	外面 回転横ナデ 内面 回転横ナデ 底部 糸切	2mm以下の礫、1mm以下の赤褐色粒、金色微粒子 外面：にぶい黄褐色 (Hue10YR7/3) 内面：にぶい黄褐色 (Hue10YR7/2)		ロクロ	
	45 土師器 (Ⅲ)	口縁部径 (復元) 8.8 器高 2.0 底径 5.6	外面 回転横ナデ 内面 回転横ナデ 底部 糸切	2mm以下の礫、1mm以下の赤褐色粒、金色微粒子 内外面：橙色 (Hue7.5YR7/6)		ロクロ	
	46 土師器 (Ⅲ)	口縁部径 7.9 器高 1.8 底径 5.4	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ 底部 糸切	2mm以下の礫、1mm以下の赤褐色粒、金色微粒子 内外面：橙色 (Hue7.5YR7/6) 底部：にぶい黄褐色 (Hue10YR7/4)		ロクロ	
	47 土師器 (Ⅲ)	口縁部径 (復元) 7.4 器高 1.7 底径 (復元) 4.8	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ 底部 糸切	2mm以下の礫、1mm以下の赤褐色粒、金色微粒子 内外面：橙色 (Hue7.5YR7/6)		ロクロ	
	48 土師器 (Ⅲ)	口縁部径 (復元) 7.2 器高 1.7 底径 4.0	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ 底部 糸切	1mm以下の礫、2mm以下の赤褐色粒、金色微粒子 内外面：橙色 (Hue7.5YR7/6)		ロクロ	
	49 土師器 (Ⅲ)	口縁部径 5.8 器高 1.6 底径 3.5	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ 底部 糸切	2mm以下の礫、1mm以下の赤色粒、金色微粒子 内外面：橙色 (Hue7.5YR7/6)		ロクロ	
	50 土師器 (Ⅲ)	口縁部径 (復元) 6.8 器高 1.8 底径 4.0	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ 底部 糸切	1mm以下の礫、1mm以下の赤色粒、金色微粒子 内外面：橙色 (Hue5YR7/6) 底部：にぶい黄褐色 (Hue10YR7/4)		ロクロ	
	51 土師器 (Ⅲ)	口縁部径 5.5 器高 1.3 底径 3.7	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ 底部 糸切	2mm以下の礫、1mm以下の赤色粒、金色微粒子 内外面：浅黄褐色 (Hue7.5YR8/4)		ロクロ	
	52 土師器 (Ⅲ)	口縁部径 5.1 器高 1.3 底径 3.7	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ 底部 糸切	1mm以下の礫、1mm以下の赤色粒、金色微粒子 内外面：橙色 (Hue7.5YR7/6)		ロクロ	
	53 土師器 (Ⅲ)	口縁部径 (復元) 7.8 器高 1.5 底径 (復元) 4.6	底部 糸切	金色微粒子 外面：黒色 (Hue2.5Y2/1)、灰黄褐色 (Hue10YR5/2)、 褐灰色 (Hue10YR4/1) 内面：黒褐色 (Hue2.5Y3/1) 見込み：にぶい黄褐色 (Hue10YR7/3)		ロクロ	
	54 土師器 (Ⅲ)	口縁部径 (復元) 9.4 器高 1.9 底径 (復元) 6.4	外面 回転横ナデ 内面 回転横ナデ 底部 ヘラケズリ	1mm以下の礫、金色微粒子 内外面：黒色 (Hue2N/0)、浅黄褐色 (Hue10YR8/3)、 灰色 (HueN4/0)		ロクロ	
	55 土師質土器 (焼塩壺蓋)	口縁部径 (復元) 8.0 器高 1.2	外面 回転ナデ 横ナデ	6mm以下の礫、金色微粒子 内外面：橙色 (Hue5YR6/6)、橙色 (Hue7.5YR7/6)			
	56 土師質土器 (焼塩壺)	口縁部径 (復元) 7.6 器高 9.0 底径 (復元) 5.1	内面 回転ナデ 面取り	5mm以下の礫 外面：橙色 (Hue2.5YR6/8)、橙色 (Hue5YR6/6)	外面：「〇下ー御壺塩師 〇見なと伊織」の印刻		
	57 瓦質土器 (火鉢)	口縁部径 (復元) 18.7 残存高 11.0	外面 ナデ後ミガキ 内面 回転ナデ	白色粒子 外面：灰色 (HueN3/0) 内面：灰色 (HueN4/1)			
	58 瓦質土器 (火鉢)	口縁部径 (復元) 21.8 器高 16.2 底径 (復元) 18.0	外面 ミガキ 内面 ナデ ケズリ	銀色微粒子 内外面：灰色 (Hue5Y4/1)			
	17	59 播鉢	口縁部径 (復元) 20.6 器高 6.6 底径 (復元) 8.4	外面 ナデ 内面 ナデ後カキ目 底部 糸切	内外面：にぶい橙色 (Hue7.5YR6/4)		
		60 播鉢	残存高 9.3 底径 (復元) 13.0	内面 カキ目 底部 糸切	黒色粒子 内外面：灰赤色 (Hue7.5R4/2) 底部・見込み：にぶい赤褐色 (Hue2.5YR4/4)		ロクロ
		61 陶器蓋	口縁部径 (復元) 9.0 器高 2.5		外面：オリーブ黒色 (Hue5Y2/2) 内面：灰色 (HueN5/0)		ロクロ
62 陶器鉢		口縁部径 (復元) 14.2 器高 4.7 底径 (復元) 3.9		外面：灰黄色 (Hue2.5Y6/2)、にぶい赤褐色 (Hue5YR5/4) 内面：灰黄色 (Hue2.5Y6/2)		ロクロ	
63 刷毛目鉢		口縁部径 (復元) 29.8 残存高 6.1	外面 横ナデ	白色粒子 外面：オリーブ黒色 (Hue5Y3/2) 内面：オリーブ黒色 (Hue5Y3/2)、灰白色 (HueN8/0) 暗オリーブ褐色 (Hue2.5Y3/3)	内面：波状文		
64 刷毛目鉢		口縁部径 (復元) 24.6 器高 7.3 底径 (復元) 8.0	外面 ヘラケズリ	外面：明赤褐色 (Hue2.5YR5/6) 内面：灰白色 (Hue5Y8/1) 釉薬：黒褐色 (Hue7.5YR2/2)	内面：波状文		
65 刷毛目鉢		口縁部径 (復元) 34.6 残存高 5.2	外面 ヘラケズリ	黒色粒子、白色粒子 内外面：にぶい赤褐色 (Hue2.5YR4/4) 釉薬：灰白色 (Hue10Y7/1)、暗褐色 (Hue10Y3/3)	内面：波状文	ロクロ	
66 磁器皿		口縁部径 14.0 器高 3.6 底径 8.0		外面：やや薄青色、暗青色、薄青色 内面：やや薄青色、染付：暗青色、薄青色 口縁：褐色 (Hue7.5YR4/4)	外面：植物文、圏線 内面：幾何学文 高台内面：圏線、角福文	ロクロ	
67 磁器碗		口縁部径 (復元) 11.6 器高 6.0 底径 4.4		内外面：灰白色 (HueN8/0) に近い	外面：花文	ロクロ	
68 磁器碗		口縁部径 (復元) 8.6 器高 5.8 底径 (復元) 2.6	畳付	釉剥ぎ 内外面：灰白色 (Hue2.5Y7/1) 染付：暗青灰色 (Hue5B4/1)		ロクロ	
69 磁器碗(小)		口縁部径 (復元) 7.2 器高 3.6 底径 (復元) 2.8	畳付	釉剥ぎ 内外面：灰白色 (Hue7.5Y8/1) 染付：明緑灰色 (Hue7.5GY7/1)	外面：コンニャク印版文、 圏線	ロクロ	
70 磁器碗(蓋)		口縁部径 (復元) 9.0 器高 2.7 つまみ径 (復元) 3.6		染付：青灰色 (Hue5B5/1)	外面：唐草文 内面：雷文 見込み：俵文		
71 磁器碗(蓋)		口縁部径 (復元) 8.8 器高 3.7	内面 回転ナデ	外面：灰白色 (Hue7.5Y8/1) 内面：灰白色 (Hue2.5GY8/2) 染付：藍色	外面：枇杷文	ロクロ	
72 水滴		最長部 7.1 最大幅 4.9 最大厚 3.1		外面：灰白色 (Hue5Y8/1)、明青灰色 (Hue5B7/1) 灰白色 (Hue2.5Y8/2) 内面：灰白色 (Hue2.5Y8/2)	恵比寿		

第2表 主屋・隠居棟出土遺物計測表

図番号	種別	法量 (cm)	技法の特徴	胎土/色調	文様	備考
32	73 土師器	口縁部径 11.1 器高 2.4 底径 8.0	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ 底部 ヘラミガキ	光沢微粒子 内外面：にぶい黄褐色 (Hue10YR7/3)、黒色 (Hue10YR2/1) 見込み：光沢灰白色 (Hue10YR8/2)	見込み：鶴文の印版	ロクロ
	74 土師器	口縁部径 11.2 器高 2.3 底径 7.8	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ 底部 ヘラミガキ	光沢微粒子 内外面：にぶい黄褐色 (Hue10YR7/3)、黒色 (Hue10YR2/1) 見込み：光沢灰白色 (Hue10YR8/2)	見込み：鶴文の印版	ロクロ
	75 土師器	口縁部径 11.1 器高 2.1 底径 7.6	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ 底部 ヘラミガキ	光沢微粒子 内外面：にぶい黄褐色 (Hue10YR7/3)、黒色 (Hue10YR2/1) 見込み：光沢灰白色 (Hue10YR8/2)	見込み：鶴文の印版	ロクロ
	76 土師器	口縁部径 10.9 器高 2.2 底径 7.8	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ 底部 ヘラミガキ	光沢微粒子 内外面：にぶい黄褐色 (Hue10YR7/3)、黒色 (Hue10YR2/1) 見込み：光沢灰白色 (Hue10YR8/2)	見込み：鶴文の印版	ロクロ
	77 土師器	口縁部径 11.0 器高 2.5 底径 8.0	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ 底部 ヘラミガキ	光沢微粒子 内外面：にぶい黄褐色 (Hue10YR7/3)、黒色 (Hue10YR2/1) 見込み：光沢灰白色 (Hue10YR8/2)	見込み：鶴文の印版	ロクロ
	78 土師器	口縁部径 11.1 器高 2.8 底径 7.8	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ 底部 ヘラミガキ	光沢微粒子 内外面：にぶい黄褐色 (Hue10YR7/3)、黒色 (Hue10YR2/1) 見込み：光沢灰白色 (Hue10YR8/2)	見込み：鶴文の印版	ロクロ
	79 土師器	口縁部径 11.1 器高 2.2 底径 7.4	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ 底部 ヘラミガキ	光沢微粒子 内外面：にぶい黄褐色 (Hue10YR7/3)、黒色 (Hue10YR2/1) 見込み：光沢灰白色 (Hue10YR8/2)	見込み：鶴文の印版	ロクロ
	80 土師器	口縁部径 (復元) 11.0 器高 (復元) 2.2 底径 (復元) 8.0	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ 底部 ヘラミガキ	光沢微粒子 内外面：にぶい黄褐色 (Hue10YR7/3)、黒色 (Hue10YR2/1) 見込み：光沢灰白色 (Hue10YR8/2)	見込み：鶴文の印版	ロクロ
	81 甕	残存高 9.7 底径 (復元) 34.5	外面 同心円状ナデ 内面 横ナデ 胴部 横ナデ	内外面：黒色 (HueN2/1)		
	82 甕	口縁部径 52.8 器高 46.6 底径 22.0	外面 ハケメ 内面 ハケメ	1mm以下の白色の礫 内外面：褐色 (Hue5YR5/6)		ロクロ
83 陶器碗	口縁部径 (復元) 9.6 器高 4.4 底径 (復元) 3.2	畳付 釉剥ぎ	内外面：灰白色 (Hue10YR8/1) 染付：藍色、赤色	外面：線刻、葵文、文字文		
84 播鉢	口縁部径 (復元) 32.2 器高 7.8	外面 横ナデ 内面 カキ目	1mm以下の礫 内外面：赤黒色 (Hue7.5YR2/1)			
85 土師器(皿)	口縁部径 (復元) 5.9 器高 1.1 底径 (復元) 3.8	外面 回転横ナデ 内面 回転横ナデ 底部 糸切	2mm以下の礫、銀色微粒子 内外面：橙色 (Hue7.5YR7/6)		ロクロ	
86 土師質土器 (焼塩壺蓋)	口縁部径 (復元) 7.4 器高 1.8	外面 回転横ナデ 内面 布圧痕	1mm以下の礫、金色粒子 内外面：にぶい橙色 (Hue7.5YR7/4)			
33	87 軒棧瓦	最長部 15.0 小丸瓦当(直径) 7.3 小丸瓦当(外線幅) 1.5 平部瓦当(瓦当厚) 1.8 平部瓦当(瓦当高) 4.5	接合ナデ 面取り	光沢粒子 内外面：暗灰色 (HueN3/0)、灰黄色 (Hue2.5Y6/2)		
	88 軒棧瓦	最長部 17.5 小丸瓦当(直径) 9.0 平部瓦当(瓦当厚) 1.8 平部瓦当(瓦当高) 4.7	接合ナデ 面取り カキ目	光沢微粒子 内外面：暗灰色 (HueN3/0)		
	89 軒丸瓦	直径 11.2 外線幅 0.9 瓦当厚 2.6	ナデ ナデ後指圧痕 カキ目	光沢銀色粒子 内外面：灰色 (Hue10Y4/1)		
	90 棟瓦	最長部 14.3 最大幅 20.9 最大厚 2.1	横ハケ	銀色粒子 内外面：黄灰色 (Hue2.5Y5/1)		
34	91 陶器鉢	口縁部径 (復元) 18.0 器高 5.8 底径 (復元) 5.4		外面：浅黄褐色 (Hue10YR8/4)、黒色 (Hue10YR1.7/1) 赤黒色 (Hue7.5R1.7/1)、極暗赤褐色 (Hue5YR1/4) 内面：黒色 (Hue10YR1.7/1) 見込み：にぶい赤褐色 (Hue5YR5/4)	外面：圏線	ロクロ
	92 陶器皿	口縁部径 (復元) 14.0 器高 4.8 底径 (復元) 4.7		1mm以下の礫 外面：暗オリーブ色 (Hue5Y4/3)、にぶい赤褐色 (Hue2.5YR5/4) 内面：暗オリーブ色 (Hue5Y4/3)		ロクロ
	93 陶器蓋	口縁部径 (復元) 11.4 器高 2.7		1mm以下の礫 外面：オリーブ黒色 (Hue5Y3/1)、明褐色 (Hue7.5YR7/1) 灰白色 (Hue5Y7/2) 内面：明褐色 (Hue7.5Y5/6)		ロクロ
	94 陶器蓋	口縁部径 (復元) 8.8 器高 3.1		1mm以下の礫 外面：暗褐色 (Hue10YR3/3) 内面：にぶい赤褐色 (Hue2.5Y5/4)		ロクロ
	95 褐釉土瓶	口縁部径 7.8 器高 7.2 底径 5.3		内外面：暗赤灰色 (Hue10R3/1)、褐色 (Hue10YR4/4) 底部：にぶい赤褐色 (Hue2.5YR4/4)		ロクロ
	96 陶器碗	口縁部径 (復元) 8.6 器高 7.5 底径 5.2		白色微粒子 外面：にぶい橙色 (Hue5YR7/4) 内面：乳白色 色絵：黒色、白色、緑色、黄色	外面：山水文	ロクロ
	97 磁器皿	口縁部径 11.3 器高 2.9 底径 6.7		内外面：灰白色 (Hue5GY8/1)、褐色 (Hue10YR4/4) 染付：青色	外面：山文 内面：山水文	ロクロ
	98 磁器皿	口縁部径 (復元) 12.6 器高 2.5 底径 (復元) 7.6		内外面：やや青みがかった灰白色 染付：青色	外面：圏線 内面：雷文、文字文、梅文 「間宿学貨」の銘	
	99 磁器皿	口縁部径 (復元) 14.8 器高 4.2 底径 (復元) 7.4	畳付 釉剥ぎ	内外面：灰白色 (HueN8/) 色絵：青灰色 (Hue5B5/1)、赤色 (Hue10R4/6)、 青灰色 (Hue5PB6/1)、明緑灰色 (Hue10GY7/1)、 明黄褐色 (Hue2.5Y7/6)	外面：橋文 高台内面：圏線 「大〇〇化〇〇」の銘	
	100 磁器碗	口縁部径 (復元) 10.4 器高 6.4 底径 (復元) 4.0	畳付 釉剥ぎ	内外面：灰白色 (Hue2.5Y8/1) 染付：暗緑灰色 (Hue5G4/1)	外面：ツル文 内面：圏線 見込み：葡萄文 高台外面：圏線	
	101 磁器碗	口縁部径 (復元) 10.4 器高 4.0 底径 (復元) 6.6	畳付 釉剥ぎ	内外面：灰白色 (HueN8/) 染付：青灰色 (Hue5B5/1)	外面：格子文、 内面：円文、圏線 見込み：円文	
	102 磁器碗	口縁部径 (復元) 9.4 器高 5.3 底径 (復元) 3.8	畳付 釉剥ぎ	内外面：灰白色 (Hue7.5Y7/1) 染付：灰色 (Hue7.5Y5/1)	外面：草文 見込み：圏線	
	103 磁器環(小)	口縁部径 (復元) 6.8 器高 3.0 底径 (復元) 2.4	畳付 釉剥ぎ	内外面：灰白色 (HueN8/) 染付：青灰色 (Hue5B5/1)、オリーブ色 (Hue5Y5/4)	内面：梅文	
	104 磁器碗	口縁部径 (復元) 9.2 器高 5.7 底径 (復元) 3.6	畳付 釉剥ぎ	内外面：灰白色 (HueN8/) 染付：藍色	外面：不明文 内面：雷文 見込み：松竹梅文、圏線	
	105 磁器碗	口縁部径 9.2 器高 5.7 底径 3.6		内外面：灰白色 (HueN8/) 染付：灰赤色 (Hue7.5R6/2)、藍色	外面：桜文 高台外面：圏線	

図番号	種別	質量 (cm)	技法の特徴		胎土/色調	文様	備考	
34	106 磁器坏 (小)	口縁部径 器高 底径	7.1 2.8 4.2			内外面：白色 染付：青色	外面：松林文 高台外面：圏線	ロクロ
	107 磁器碗	口縁部径 (復元) 器高 底径 (復元)	8.8 6.0 3.6	畳付	釉剥ぎ	内外面：灰白色 (HueN8/ 染付：藍色	外面：草文	
	108 磁器坏 (小)	口縁部径 (復元) 器高 底径 (復元)	7.6 3.5 2.6	畳付	釉剥ぎ	内外面：灰白色 (HueN8/ 染付：青灰色 (Hue5B6/1)	外面：笹文	
	109 磁器碗 (京焼風)	口縁部径 器高 底径	8.1 5.6 3.4			外面：灰白色 (Hue10Y8/1)、灰白色 (Hue2.5Y8/2) 内面：灰白色 (Hue7.5Y7/1) 色絵：赤色 (Hue7.5R4/8)、にぶい黄褐色 (Hue10YR4/3)	外面：植物文	ロクロ
	110 磁器坏 (小)	口縁部径 (復元) 器高 底径 (復元)	6.9 3.3 2.8	畳付	釉剥ぎ	内外面：灰白色 (HueN8/ 染付：暗オリーブ灰色 (Hue5GY4/1)	外面：笹文	
	111 磁器碗	口縁部径 器高 底径	11.2 5.2 3.8	畳付	釉剥ぎ	内外面：灰白色 (HueN8/ 染付：藍色、緑色	外面：○×文	
	112 磁器碗	口縁部径 器高 底径	10.9 5.2 3.8	畳付	釉剥ぎ	内外面：灰白色 (HueN8/ 染付：藍色、暗緑色 (Hue10GY4/1)	外面：○×文	
	113 磁器碗	口縁部径 器高 底径	8.3 4.8 3.0	畳付	釉剥ぎ	内外面：灰白色 (HueN8/ 型押：黒色 (Hue10Y2/1)、明赤灰色 (Hue10R7/1)	外面：花文、スズメ文	
	114 磁器碗	口縁部径 器高 底径	8.0 4.8 3.0	畳付	釉剥ぎ	内外面：灰白色 (HueN8/ 型押：黒色 (Hue10Y2/1)、明赤灰色 (Hue10R7/1)	外面：花文、鳥文	
	115 染付水差	口縁部径 器高 底径	6.3 14.4 6.9			内外面：灰白色 (Hue7.5Y8/1) 染付：藍色	外面：凹文、花文、圏線	
	116 磁器碗(蓋)	口縁部径 (復元) 器高 つまみ径 (復元)	9.2 2.9 3.4			内外面：灰白色 (Hue2.5GY8/1) 染付：青色	外面：うろこ状文、動物文 内面：雷文 つまみ：圏線	
	117 磁器碗(蓋)	口縁部径 (復元) 器高 つまみ径 (復元)	9.0 2.8 3.7	つまみ	釉剥ぎ	内外面：灰白色 (HueN8/ 型押：藍色	外面：花文、草文 内面：雷文 見込み：軍配文、圏線	
35	118 磁器段重	口縁部径 器高 底径	12.2 6.7 10.9			内外面：灰白色 (Hue7.5Y8/1) 染付：赤色、黄色、緑色、茶色、青色	外面：幾何学文	
	119 磁器皿	口縁部径 (復元) 器高 底径 (復元)	15.5 3.5 9.3	畳付	釉剥ぎ	内外面：灰白色 (HueN8/ 染付：藍色	外面：唐草文 内面：植物文 高台外面：圏線	
	120 陶器皿	口縁部径 器高 底径	12.6 4.0 5.1			外面：淡黄色 (Hue2.5Y8/3)、灰白色 (Hue2.5Y8/2) 内面：淡黄色 (Hue2.5Y8/3)		ロクロ
	121 磁器皿	口縁部径 器高 底径	13.7 3.2 7.2	見込み 畳付	蛇目釉剥ぎ 釉剥ぎ	内外面：灰白色 (Hue7.5Y7/2) 見込み：淡黄色 (Hue5Y8/1) 染付：灰オリーブ色 (Hue5Y4/2)～オリーブ黒色 (Hue5Y3/2)、 薄青色	内面：菊唐草文 見込み：五弁花文、圏線	ロクロ
	122 磁器碗	口縁部径 (復元) 器高 底径 (復元)	5.4 5.6 3.2	畳付	釉剥ぎ	茶色微粒子 内外面：白色 染付：黒色、赤色	外面：文字文	
	123 磁器	器高 底径 (復元)	4.8 9.0	底部	回転ナデ	内外面：灰白色 (Hue5GY8/1) 染付：青色	外面：花文	
	124 タイル	残存長 残存幅 最大厚	12.2 11.3 2.0			1mm以下の襷、光沢微粒子 表面：灰白色 (Hue5Y8/1) 染付：青色	表面：植物文	
	125 ガラス瓶	口縁部径 器高 底径	3.1 3.7 3.6			緑色透明		
	126 ガラス瓶 (インク瓶)	口縁部径 器高 底径	1.7 4.4 3.5			無色透明	底部：「M」「U2」の陽刻	
	127 ガラス瓶	口縁部径 器高 底径	1.7 8.9 3.0			茶褐色透明		
	128 ガラス瓶	口縁部径 器高 底径	2.1 7.7 3.4			淡緑色透明		